

翻 訳

フィールド・ワークの地からの書簡選集 (1924年～1934年)

— 翻訳を通して感じる当時の知識人の声を聴くことのむずかしさ —

***Ruth Benedict's Correspondences to and from the Field (1924-1934) with
Comments on the Difficulty of Filling in the Context for the Intellectual
Interaction between Benedict and Her Fellow Researchers***

菊 地 敦 子 福 井 七 子
Atsuko Kikuchi Nanako Fukui

This is a translation from English to Japanese of Ruth Benedict's selected correspondences to and from the field (1924-1934) that was published as a chapter in the book *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict* (1959).

There are particular difficulties associated with the translation of correspondences between fellow researchers. One such difficulty is that many of the letters refer to academic discussions that Benedict had with Mead, Fortune, or Boas, the content of which we have no access to, or to books or research papers that we cannot be expected to know the full content of, or to people that we have very little information about, or to events that we can only guess about. This meant that we had to frequently interrupt our translation to figure out what was being referred to in the letters.

Another difficulty of translating letters has to do with the intimate content of the writing. These were private letters, only meant to be viewed by the receiver, so there are frank criticisms, gossip about colleagues and expressions of intimate affection. Of course, these factors make this material all the more valuable for researchers, but without precise knowledge of how intimate the two correspondents were, it was often difficult to select the right tone of voice. There were also references to past private conversations between the correspondents that were difficult to decipher. On top of all this, Mead, in editing the letters, cut out parts of the letters, which sometimes made the content less cohesive.

In translating the letters, it became clear to us that there was much bouncing of intellectual ideas between Benedict and Mead, and also that they supported each other during the difficult times they had in the field.

キーワード

ルース・ベネディクト、フランツ・ポアズ、マーガレット・ミード、フィールド・ワーク、
『文化の型』

この翻訳はマーガレット・ミードがルース・ベネディクトの死亡の約10年後に *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict* (以下 *An Anthropologist at Work* とする) として1959年に Houghton Mifflin 社から出版された本の一部である。本著は Part I から Part VI で構成されており、ベネディクトの日記、書簡、論文そしてベネディクトとサピアとの間で交わされた詩なども含むいわばアンソロジーともいえるもので、notes や index も入れると583ページにも及ぶ書である。本著の特色は、マーガレット・ミードによってベネディクトの死後に資料が収集され、ミード独自の価値観により編集されていることで、それがこの書の彩りともなっているが、同時にミードの自我も所々に散見でき、それも興味深い点である。ベネディクト文書の大半はヴァッサー大学に保管されている。ヴァッサー大学のベネディクト・コレクションの現在のディレクターはミードの娘であるキャサリン・ベイトソンである。しかし、本書がこのコレクションすべてを含むものではないことは断っておかねばならない。コレクションにはまだ極秘とされている文書や現存している人物が書いたものもあり、その意味ではすべてが開示されているわけではない。コレクションにはないものが、本書に書かれている場合もある。しかし、ベネディクト研究には欠かせない書であることは誰もが認めていることである。マーガレット・ミード自身もルース・ベネディクトについて一冊の本を書いているが、*An Anthropologist at Work* をベースとしたものである。

ベネディクト研究を始めてからこれまで5回に及ぶ資料収集をヴァッサー大学中心に行ってきたが、本書の独特の編集の仕方、ベネディクトの人物像を語るミードの語り口は、ベネディクトのみならず、ミードを研究する場合にも必携の書である。菊地先生とともに手がけたがこの先の見えない大著 *An Anthropologist at Work* の翻訳である。ついでに付け加えておくと、*An Anthropologist at Work* はいまだ邦訳は出ていない。

今回完成したのは、「フィールド・ワークの地からの書簡選集」(*An Anthropologist at Work* 284-338ページ) である。翻訳作業は終始難渋の連続である。ある時は文化人類学者ルース・ベネディクトの概念を巡って、またある時は彼女の決して単純ではない心理や人格についてなど、翻訳は難儀を極めた。その当時流行していた書物や、文化人類学、心理学に関して彼女たちが読み、またそれをテーマにした感想などが随所に現れ、そうした論文や書物について若干の知識をもつことが求められることも多々あった。また、フィールド・ワークをしていてその地での苦労話が唐突に現れることもある。フィールド・ワークはたいての場合一人で行なわれることが多いのだが、その際のネイティブ・アメリカンとのかけひきや、現地調査の孤独や苦難などもあり、私たちは内容を把握するために翻訳作業だけではなく、様々な文献を参照に

する必要に迫られた。またここに収集された書簡のほとんどは、個人的な手紙であり、もともと第三者に読まれることを意図して書かれたものではない。しかしだからこそ彼らの間で交わされた文書は、その当時の彼らの生の声が聞けるということでもある。

マーガレット・ミードがこの書簡選集の意義について書いている。「フィールド・ワークというのは、ある種特別な距離感があるものなので、現地からの手紙を提示する場合、読者に現地の状況を知ってもらわねばならない。そして現地から時空を超えた誰かに特別な手紙を書く場合、手紙の書き方は独特の話し方や考え方がなされていることも理解してもらわねばならない。」（Mead, 1959 : 284）

ベネディクトやマーガレット・ミード、レオ・フォーチュンといった人物が当時手がけていた仕事、そしてフィールド・ワークがどのようなものであったのかについて私たちは把握しなければならなかった。またマーガレット・ミードとルース・ベネディクトの二人だけに共通するトピックについて、そして彼女たち独特のタッチと感覚で書かれた文書を理解することも決して容易ではなかった。

マーガレット・ミードとレオ・フォーチュンは1928年10月8日にニュージーランドのオークランドで結婚した。従ってこの書簡選集には彼の手紙、あるいはベネディクトからフォーチュンへの手紙が登場する。彼はドブ族の調査をし、ドブ族についてのすぐれた論文や著書を残している。しかし、彼はこのドブ族が嫌でならなかったという裏話も書かれている。ベネディクトは彼女の代表作の一つ『文化の型』のなかでどうしてもドブ族の文化を入れたいと考え、フォーチュンにその使用許可を願う手紙もこの選集には含まれている。ベネディクトらしい獲得の言い回しで、その使用許可を願う場面は興味深いところである。

手前味噌になるかもしれないが、英文のニュアンスをここまで理解できる翻訳者は菊地先生以外には知らない。私のルース・ベネディクトについての20年余に亘る研究から得た知識を加えることで、内容的にもなんとか理解できるものに仕上がったのではないかと考えている。

これまでの5年余りの長期にわたる翻訳作業は私たちにとってもずいぶん考えさせられる時間でもあった。菊地先生の人生の生き方、そして私自身の人生を語り合う機会ともなっていたことは、ベネディクトとミードという二人の関係性が重要であるが故に、翻訳上、関わらざるを得ない時間ともなった。そうした貴重な詳細については本書が出版された折には、書いておく必要もあろうか考えている。

また本文の翻訳に際して、現在差別的だと考えられている語がある。しかし、ここでは本文の通り訳することにしたことをお断りするものである。

References

- Mead, Margaret. *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*, New York: Houghton Mifflins, 1965.
マーク・ジョーン『マーガレット・ミード はるかな異文化への航海』大月書店、2009.

フィールド・ワークの地からの書簡選集

1924-1934

現役の文化人類学者の人生においてフィールド・ワークは中心的なものである。人生の出来事はひとつの実地調査の前、あるいは最中、または後に位置づけられる。自分の学生を初めての実地調査に送り込むのは教師にとって重要な決断である。新しい課題をもって、新しい地域に赴くことは、いつも大きなチャレンジである。73歳の年齢ですでに American Association for the Advancement of Science (科学の推進のためのアメリカ学会) の会長をしていた時に、ジェスチャーの研究をするために映画という新しい技術を持ち込んだフランツ・ボアズにとっても、それは同じであった。

フィールド・ワークというのは、ある種特別な距離感があるものなので、現地からの手紙を提示する場合、読者に現地の状況を知ってもらわねばならない。現地から時空を越えた誰かに特別な手紙を書く場合、手紙の書き手は独特の話し方や考え方がなされていることも理解してもらわねばならない。ここに集めたものは、ベネディクトが1924年に行なった二度目の現地調査から1939年の最後の調査の期間に書いた何百もの手紙のなかから、南西インディアンの状況を初めて記述したもの、私が現地調査をし始めた頃に、学生であった私のために家で現地の文化人類学的出来事を再現し、アドバイスを書いてくれたもの、そして『文化の型』に最も関連があるものである。

〔ペンシルバニア、ホリコングにいるマーガレット・ミードから
ズニにいるルース・ベネディクトへ〕

1924年8月30日

作家ランドルフ・ポーン¹⁾の「勝利」は、はじめ典型的なアメリカ的勝利と思っていました。彼は自分のプロヴィンシャルリズムを克服し、物事を物質的繁栄で測るというちっぽけさから解放され、本物の国の文化という意味、そして地元の差別に惑わされずに他の文化を理解することを獲得したと思いました。このような態度は、今日の若いインテリゲンチヤが当たり前と思うことです。そして彼は、あなたが厄介と思っている「奉仕」の概念（希望ある活動に水を差すもの）にとらわれることはありませんでした。またエレクトラ・コンプレックスやオイディ

プス・コンプレックスのような不快なものなしに、期待された愛情、求められて呼び起こされた愛情というものの価値のなさを示したと思います。また英文学が求める古典主義から免れることもできていると思います。もしかするとあなたが説明してくれた戦前の人々の態度を私は誤解しているのかもしれませんが、あなたの説明を使ってポーンの実現に存在し、残忍な敵との戦いそして得た勝利を説明すると、これらの戦いは私の世代とは何のかかわりもなく、私たちの世代は勝利のみをただ受け入れているだけです。ポーンはまた寛大であることを学び、ピューリタリズムを厄介なものとは考えず、異教徒の子どもっぽい側面としてみることを成し遂げました。

あなたが一人にいると思うとつらいです。もっとも、私がいなくて私の話を聞かなくても済むのでいいのかもしれませんが、一緒に現地調査ができればいいのに。でも今の私の状態ならば、おそらく耳にたこが出来るほどしゃべりまくることでしょう²⁾。私は考えることを止められないのと同様、しゃべることも止められないようです：

死んでいるか寝ている時、
何の痛みもなしに
私の魂は宝石が散りばめられた脳のなかを
のろのろ動き回らなくなるだろう。

でも、エリノア・ワイリーに賛成することはできないわ。今のところ私の魂はとどまることはないと思う。魂が永遠に回り続ける円を見つけたから。

この夏に書いたものがいくつかありますので、それらがタイプ出来次第、お送りします。できは全く悪いのですが、私が成し得る最悪のものを見てもらった方がいいと思います。あなたは私を過大評価していますから。

〔ニューヨークのマーガレット・ミードから
ズニにいるベネディクトへ〕

1924年9月8日

今朝の郵便であなたが私の論文³⁾について書いた手紙と、サピアからの手紙を受け取りました。だから考える時間はあまりなかったのですが、考えることはたくさんありました。サピアが手紙を書く時間があるということは、非常に悪い兆候だと思います。しかし、サピアからの手紙はいつもうれしいです。彼との友情は本当に心地よいもので（あなたのおかげで）、退屈な社交辞令によって友情が損なわれることなく、本当の意味で同じ考えに基づいた友情です。

私のまわりの人たちは、私の頼むタスクをこなす以上の能力を持っているのではないかと、あなたの意見ですが、ユング的な言い方をすれば、彼らを外向的、内向的に分けずにみんな同等だとすれば、あなたのおっしゃる通りかもしれません。もちろん私は外向的な人たちが好きですが、彼らが直感的かどうかに興味があるのです。本当に彼らが直感的であれば、タスク

は退屈すぎるかもしれません。でもそんなことはないように思います。何人かの人たちは組織に対する感覚、あるいは改革の精神（もちろん彼らは抽象的な理想のために戦っているのであり、単に他の人たちを従わせるために戦っているわけではありません）を持っています。タスクに合っている人たちがいるように思えます。あなたがおっしゃる通り、個人の自由を頑なに信じるような普通の人たちであれば、継続は保証されるのでしょうか。もしかすれば結局、私は、自分たちの戦いを自分で戦わせるというピューリタンの考えをもっているのかもしれませんが。これは言う価値があるとあなたに言ってもらって、本当にほっとしています。

イザベル⁴⁾が千人の子どもたちの家系図を集めて戻って来たのですが、とてもがっかりして帰ってきました。イザベルは週末にニューヨークに暮らし、週の間はパサイクで暮らし、授業のためにだけここに来ます。もしキングスコート⁵⁾に戻らないとすれば、あなたとイザベルがいっしょに部屋をシェアすれば、ちょうどいいのではないかと思います。今、私といっしょに南洋に来るように彼女を説得するために全力を傾注しています。一人で行くよりその方がずっといいです。

今、6時30分で、休み時間を30分しか取らないように心がけています。食器を集めなければならないし、その後『ジャーナル』⁶⁾のために今夜中に30通くらい手紙を出さねばなりません。

私の博士論文のための簡単な計画書をタイプして、この手紙に同封しておきます。

あと二つ些細なこと――

- (1) マーカス・ガーヴィー会でスイカが出ました。彼の想像力には感謝しています。
- (2) レオニーは中国の絨緞のデザインのほとんどを手がけている女性に会いました。アメリカ人によるデザインの方がよく売れるそうです！

〔ニューヨークのマーガレット・ミードから
ズニにいるルース・ベネディクトへ〕

1924年9月13日

怠けろ、破目をはずせ、怠けろ、破目をはずせ。その呪文を自分に言い聞かせるのは止めるわ。先週末、色んなことを済ませようと思っていたんですが、お祝いをしていて目にガラスの破片が入り、何もすることができませんでした。ゴードイーと一緒に学会に行ったのですが、着いた時には悲惨な姿でした。でも彼とは馬が合いました。彼のやり方は、人が主張するすべてのことをいちいち弁明することのようです。私の二番目⁷⁾の計画が一番よいと彼は判断したのですが、私も同じ考えです。私が舟作りの分析と分岐を行うことを願っており、どのような分布図かを決定する前に、自分にその分析を見せてほしいと言っています。アウトラインを作成して2つか3つの分布図の部分ができ、ボアズ博士のためのイタリア人に関する論文⁸⁾を終わらせることができれば、それも悪くないと思います。

ボアズ博士は月末まで戻りませんが、彼の帰りを待ち遠しいと思っている人が世界にたくさ

んいるようです。例えば、ヨヘルソン（Jochelson）先生、そしてボアズ博士が帰るまでお金は何とか間に合うと思っている小さなドイツ人の男の子などです。しかしジャネットに言わせると、男の子はお金についてあまり自信はなさそうです。ヨヘルソン先生は、半分狐で、半分はおだやかな獣の犬のようです。一緒に仕事をするにはいい相手です⁹⁾。塔の部屋はグリアンから持ち帰ったものでいっぱいです。ほとんどがつまらないものですが、木の枕だけは不思議です。……

……あなたの手紙を読むと、私の8倍近く仕事をしているように見えます。ものすごく疲れているのではないですか。11時間のデイクティションなんて。一日13のビネ・テスト（Binets）¹⁰⁾をしたのを思い出します。全く苦々しい思い出です。

〔ニューヨークのマーガレット・ミードから
ズニにいるベネディクトへ〕

1924年9月16日

詩の出来の悪さはわかっていました。……あなたが言う私の気分の表れであるということに関する質問はよくわかりませんでした。自分の退屈や、自分に取りついたものを振り払うために書いたのです。そして、そこで様々なものが描かれているのは、途中で出てきたものを最後まで終わらせることができなかつたからです。そのほとんどはあなたが言う「自分のとうもろこしが踏みつけられたら、痛い」という記述に合ったものでした。

〔フランツ・ボアズからミズーリ州
ウエスト・アルトンにいるルース・ベネディクトへ〕

1925年7月16日、コロンビア大学にて

親愛なるルース

サピアと長い間マーガレットについて話しました。彼女が長期間、熱帯地に行くことに私はあまり賛成していないということをご存知だと思います。しかし、彼女を行かせるのは多少リスクはあったとしても、彼女がやろうと心に決めている仕事をする邪魔をする方がもっと事態を悪くすると思います。彼女がトアモト（Tuamotu）に行くのを止めさせ時からそう考えるようになりました。私に言わせればサピアは心理学に関する本を読み過ぎており、彼の判断はしたがってあまり信頼できないと思います。彼は心理学を十分に理解しておらず、アブノーマルなものを最悪の状態としてとらえてしまいます。もちろんマーガレットの神経が高ぶりやすく、感情的なのは知っています。しかし、肉体的な造りや性格によって自分の好きなことができないということは、彼女を何よりも憂鬱にさせることも知っています。彼女にこの旅をあきらめさせようとする（サピアはこれしか考えていません）は、最悪の結果をもたらすでしょう。しかもそのようにして人の将来に極端に介入することは、何か病気があって行かせられないと

いう場合を除いて、許されないというのが私の見解です。もちろんサピアは、そこに病気があるという見方をしているのですが、それでは誰を行かせることができるのでしょうか。できればすぐに、あなたからお便りをいただきたいと思います。マーガレットは今月の25日までフィラデルフィアにいます。

[フランツ・ボアズからマーガレット・ミードへ]

1925年7月14日

親愛なるマーガレット

出発の日がだんだん近づいていますが、もう一度あなたに健康に留意するように申し上げたいと思います。熱帯地では気を付け、日中あまり暑かったり、湿度が高ければおそらく働かないとは思いますが、天候が著しく悪く、我慢できないようなら帰ることを恥ずかしく思わないように。あなたがやろうとしている問題は、他の場所でも解決することができます。色々なことをすでに慎重に考えたこととは思いますが、あなたに注意していただきたいことが1、2あります。たとえもうご存知だとしても、これらに注意を払ってもらいたいと思います。

私が大変興味を持っている問題の一つは、習慣の制約に対して若い女性がどのように思っているかということです。私たちの文化では思春期に強い反抗心が芽生え、それは不機嫌さや急に怒鳴り出すといった態度に現れます。人によっては思春期に弱々しく、従順になることもあり、その場合、抑え込まれた反抗心は違った形で現れます。たとえば、一人でいることを望んだりするのですが、これは本当は自由への願望です。また時には、人が集まる場所に強制的に自分を置き、精神的なトラブルを打ち消そうとします。このようなことがどの程度未開社会に見られるのか、そして自立に対する欲望は個人主義が強く発達している近代社会に特有な状況なのか、私にははっきりわかりません。

もう一つ興味を持っているのは未開社会の女の子の持つ過度の羞恥心です。あなたが行かれる所にも同じものが存在するかどうかわかりません。この特徴はほとんどのアメリカン・インディアンの部落に見られる女の子の特徴で、外の人たちのみならず、狭い家族のサークルのなかにも見られます。彼女たちは話すことを怖がり、年とった人たちの前ではとても大人しいのです。

もう一つ興味深い問題は、女の子たちの間に見られる一目ぼれ現象です。少し年長の女の子の場合、恋愛に特に注意したらいいと思います。私が観察した限り、恋愛は結構盛んで、女の子の親、あるいは社会が彼女に強制的に相手押し付けた時、恋愛の話が浮かび上がってきます。……

……個別な事例、そしてパターンに集中しなさい。ルース・ブンツェル (Ruth Bunzel) が手がけたプエブロの芸術¹¹⁾、あるいはヘバレン (Haeberlin) が扱った北西海岸¹²⁾の研究のように。ニューギニアの家族のなかの一人ひとりの行動について書いたサイキ (Psyche)¹³⁾という

マリノフスキー（Malinowski）の論文をお読みになっていると思います。彼はフロイド派の影響を受け過ぎていますが、彼の扱った問題は、私も考えていることです。がんばってください。進捗状況を近いうちに教えてくださることを期待しています。すべての面で、あなたの旅がうまくいくことを望んでいます。お体に気をつけてください。心を込めて。

〔ベネディクトからボアズへ〕

1925年7月18日、ウエスト・アルトンにて

親愛なるボアズ博士

先生からのお手紙が今届きました。マーガレットに対する先生のお立場、心から賛成します。サピアが心配していることは前々から存じており、考慮すべきことと考えておりました。昨年の春、マーガレットをととも優秀な二人のお医者さんのところへ連れて行きました。一人は神経科医で、二人とも何の異常もみつけることはできませんでした。診断は神経疲労で、休息をとることを処方されました。熱帯気候に特有ののんびりした環境へ行き、今の彼女の厳しい環境から遠く離れて、少し嫌でも行き当たりばったりの仕事が求められることは、彼女にとって一番いい変化になるのではないかと思います。

サピアは彼女の精神状態について心配しすぎていると思います。もちろん、熱帯の感染のリスクは大きいです。特に、今の彼女はそうした感染に抵抗できるだけのスタミナは持っていないと思います。先生が手紙で、身体に気をつけ、リスクを避けるようにとお書きになったことをマーガレットは真摯に受けとめることと思います。ビショップ・ミュージアムがスタッフを派遣する時には健康診断の後に、医学的アドバイスをし、簡単な応急手当などを教えるのではないのでしょうか。そうでないとしたら、ハワイを出る前に、マーガレットは熱帯地を知っている一番いい医者に診察をしてもらうべきだと思いますし、たとえそれで仕事が中断することになったとしても、医者ということは聞くべきだと思います。そのような注意事項をお書きくだされば、マーガレットにとって重要な意味があると考えます。

マーガレットが発つことを心配しているとサピアが書いてきたので彼を慰めようとしています。マーガレットを止めるとひどいことになるでしょう。ミュージアムから来年度に関する誘いがあったと書いてきました。今の時期にこうした誘いをもらうことは、サピアの心配を静めてくれるでしょう。彼女はとても喜んでいます。私が心配しているのは彼女の体力で、幸い私の警告を彼女は聞き入れてくれます。彼女は常識をもっている人ですし、自分に必要だと思ったら出来る限り注意を払うに違いありません。来週28日の火曜日にニューヨークに行き、研究室に寄ります。先生にお会いできればうれしいです。

[ズニにいるベネディクトからサモアに向かっている

マーガレット・ミードへ]¹⁴⁾

1925年8月6日

この場所をとっても愛する気持ちが私のなかにあることを発見しました。それは突然私にふってわきました。—— 私たちが¹⁵⁾車で着いた時には大粒の白い雨が降っており、雲には光があたっていました。遠くの岩石丘の前で雨のやわらかいヴェールが揺らいでいました。ズニの小山の赤い段々がこれ以上に美しく映える光景はないと思います。

[ベネディクトからミードへ]

1925年8月11日、ズニにて

サンフランシスコを18日に発つ船に乗るのは、この手紙が最後に違いありません。……あなたのまわりを囲む美を作ることはできないということはわかっています。痛みだけはなしに……そして別な時は、あなたはそれが大好きに違いありません。なぜならあなたはいつもあなたであり、最終的には不屈の人だから。結局、これだけが人生のなかで安全なものです。……そして私たちはいつもそこにたどり着くまで魂を悩ませながら戦うのです。そこに何かを築くのに本当に安全なものは何もなく、私たちは惨めな土台を何度も何度も築き直すのです。そこから得られる安らぎは一つしかありません。信じられないことですが、それは私たちのなかに確固たるものがあり、それが幾度となく壊され、崩壊されても、私たちから取り上げることはできません。誰でも、どの人でも繰り返し感じられる確信なしにはやっていけません。あなたも今も、あるいは将来も、それを感じることもあるでしょう。自分を大切にしてください。つまらないものでも身体にいいものをすべて食べ、眠るのが不可能な時に眠り、背信行為と思っても軽率なこともやってみなさい。

[ベネディクトからミードへ]

1925年8月15日、ズニにて

そしてこの手紙はサモアに行きます。サモアがどんなところか、そして何が待っているのか知るのが待ち遠しいです。言葉の上達はどうか。同情します。私は3年経ってもズニ語は学べそうもありません。でもあなたの記憶力と、あなたと〔私〕の耳の違いを考えると、あなたなら3か月で覚えると思います。私と一緒に調査をしていなくてよかったと思います。なぜなら、私が言葉をどのように覚えるかを知ったら、あなたはおそらくカンカンになることでしょう。ニックとフローラ¹⁶⁾は、今年の夏は私の言うことをよく聞いてくれています。ニックはかけがえのない人です。—— 彼のお経のような口調の詩歌を原稿にできたらいいのですが！彼が「神聖な物語」と呼ぶものは、フローラの物語と同じ位儀式的な詳細で溢れているので、それらはズニの文化のなかではっきりとしたタイプを確立しているのだと思います。しまいには

ニックが好きになると思うわ。彼は昨日、目を輝かせて出現の物語を語ってくれました。22の（神聖な）歌に22回繰り返して出てくるエピソードです。途中でとばそうとしたのですが、あまりにも習慣になっているためそれはできませんでした。途中で何回か中断して same thing same thing の代わりに Zame zing, zame zing というのですが、結局同じことを最後まで繰り返しました。彼の情熱には何か感動的なものがあります。彼は偉大な人になれたかもしれません。しかし、どの社会でも、その社会なりの方法で彼を魔女扱いしたと思います。彼は一匹狼で、人を軽蔑するので……一番ルーティーン化している事柄を説明することによって、あなたにこの様子を感じとってもらおうとしています。——何を食べているのかとか、どんなインディアンが来るかについて読まなくて済むのを有難く思いなさいよ。あなたからの手紙の間隔が3週間間隔になることがどんな感じか、それが一年間続くことがどのような感覚か、だんだんわかってきました。インディアンが時を数えるのに祈り棒を埋めるように、私は汽船が来るのを数えることで時の過ぎるのを数えます。……私が最も執着して論じていること、それは人生が事柄の果てしない羅列であるということ覚えていらっしゃると思います。だからパターンは大体決まっています。もし手紙の間隔が6か月だとしても、出来事によって人生を取り戻すことができるのです。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1925年8月19日、ズニにて

隣にいる「親切な宣教師」が書いたズニ辞典から言語分析の助けを得ようとしています。ズニの集落には二つのタイプがあり、一つは親切で、もうひとつは「そうではない」ものです。隣の宣教師は25年前にここに来て、9人の子どもを育てたということです。20年前に宣教師をやめ、貿易の仕事を始めたのですが、とてもやさしい人たちです。でもこの辞典たるや、何とすべきでしょうか。辞書は aggrandize とか aggravate から始まり、evolution や harlot という言葉も含まれています。Idol はズニ語では katanc となっています。二つの異なった人々の興味の違いを象徴するような本です。辞書に載っている単語のうち、50の中の一つもズニの一般的な会話には出てきません。そして私が聞いた民話で何度も聞いた語は、ひとつも載っていないのです。……

ルース・ブンツェルが明後日来ます。……そして私は月曜日に発ちます。そこから私はペーニャ・ブランカに行きます。

僧侶の入れ替わりによって、ペーニャ・ブランカで彼らの助けを得る望みは消えました。とにかく行って見て、うまく振る舞い、どんな結果になるかみるしかありません。時間を無駄にすることになりますが、ほかにどうすることもできません。ズニのアントニー神父がそこにいてくれるといいんですが。彼はとてもいい人で、ズニに来たどの人も自分の小さなチャペルによんで、お祈りがしたかったなら、そのようにさせてくれます。私をチャペルに連れて行って

くれた時、まるで愛人に会いに行くかのように、頬を赤くしていました。彼はそこに住んでいる他の人たちと違って苦しんでいる様子を見せず、神に呼ばれてこの仕事に就いたと言っていました。仕事の細かい部分に苛立つことがあるとしか言っていませんでした。時間さえかければ、私も改宗することができるとも言っていました。もしかしたら、そうかもしれません。そのような信仰の——に惚れ込んでいるところがあるので。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1925年8月24日、ズニにて

今日がズニでの最後の朝です。ルース・ブンツェルは金曜日の最後の郵便車でやってきました。昨日は神聖な崖を登りました。岩石丘の麓の道を歩きました。そこから見ると岸壁は高くそびえ立っており、何度行っても新しい感動があります。神になったら私はそこに町を作ります。

ペーニャ・ブランカに関して、とても幸運なことがありました。サンタフェ美術館のハルセス氏がグループと一緒にいらっしゃっていたのですが、とても感じのいいドイツ人で、コチティをよく知っているそうです。コチティに親しいインディアンの友人がいるということで金曜日にコチティに車で連れて行ってくれ、ペーニャ・ブランカのインフォーマントを紹介してくれることになっています。これ以上いいことはありません。サンタフェで二日間のんびりできるのもうれしいです。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1925年8月25日、サンタフェにて

のんびりしたところで優雅に過ごしています。ペーニャ・ブランカに行かずに、ここにずっといたい気持ちです。今を満喫しています。明日出発しますが、今日は最高です。今日は小川に沿って山に入っていました。山の上には輝く雲が幾重にも重なり、麓に影を落としていました。岸辺に横たわって……

私の多くがあなたの詩集¹⁷⁾に閉じ込められています。そのことをあなたがわかってきているのがうれしいです。私の詩を読んで、私のささやきを感じてくれれば喜びはひとしおです。ひとつお願いしてもいいですか。私の詩の中で手許に置いておきたい詩や、心に残る詩、心を苦しめるような詩があれば書いておいてください。あとでお送ります。おそらくすでに色々お考えになったと思います。……新しい話が聴けてよかったですね。それをコピーするお時間があれば、読みたいものです。『メジャー誌』¹⁸⁾を見かけたら、すぐにルイズ・ニコールの住所をお知らせします。

サモアはあなたにとって活気あふれたところですか、それとも心安らかな場所ですか。詩を書く時間がありますか。詩を書く気分になれるか。そうだといいのですが。最近、なかなか詩を書き終えることができず、もちろん時間もありません。ペーニャ・ブランカでもまた一人

ぼっちです¹⁹⁾。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1925年8月29日、ペーニャ・ブランカにて

ボアズ博士を裏切っていると心配するのはもうやめます²⁰⁾。ここで私はボアズ博士をたてまつり、しかも永遠なる忠誠を誓おうとしています。明日はコチティからインディアンが来て、6時間仕事をしますが、それは24時間のうちわずか6時間だけです。残りの18時間は私の時間なのです。今、メキシコの家族と住んでいます。トタン屋根がある、きれいな部屋です。でも家族のお母さんは体調が悪く、私にごはんを作ることができません。ミルクとトマトは与えてくれるし、店に行けばパンとバターが手に入るし、儀式的に一日3回食べる必要がないのでほっとしています。しかし、自分の時間を食事にとられるようなことはしていません。

ここの僧侶にいろいろなことを任せなくてよかったです。尼さんたちはとてもすてきな人たちばかりで、私に家を提供したいようでしたが、僧侶の長が禁止しました。ハルセット氏には本当にお世話になりました。運転手、保証人、そして紹介者にもなっていました。ハウリットからボアズに指導担当を代えることができるといいのですが、それはむずかしそうです。ハウリットを通して、この分野に興味を持ったようです。彼の目標はケレス（Keres）を学んで、記録することで、特にシア（Sia）の方言を学びたがっています。ボアズの心を奪うのに、これほどぴったりの内容はないと思いませんか？ハルセット氏はシアで教師の仕事をしようと思っているようです。彼はリオグランデのすべてのプエブロに親しい友人がいて、インディアンにお金を払わねばならないような人たちを少し馬鹿にしているようです。そのわりには彼は物事を学ばない人です。

ここが気に入っています。リオグランデの平原の向こうにあるジェメ山脈は、グランドキャニオンのひとつの壁を小さくしたような景色です。グランドキャニオンでも刻々と影が落ちる表面が変化していましたが、ここでもそうです。水平線の四分の一がオパールのような色です。アルファルファととうもろこしの緑の畑、そして川に沿って伸びるハコヤナギの木によって、その光はさらに緑に輝きます。午前中は山に雲がかかり、雲は山のように静かで、しかも山より形に変化があり、雲が落とす美しい影は山の美しさを引き立てています。

地球から離れ、時空がない場所に降り立ったという感じがするのは、今日郵便局に通も手紙が届いていなかったからです。

新しい『ネーション』誌に載るマーグレットの詩を見落とさないでね。詩のなかのイメージを知っており、またその詩が彼女自身であることを知っているが故に、感動を覚えたんだと思います。

『ポエトリー』の6月号に載った彼女の詩も、「クリニクの」でしたが、これより劣るものです。彼女の詩はいつもバラエティーに欠けていますが、自分がこだわっているものを何度も

何度も詩に表現できれば彼女にとってよいことですし、私たちにとってもいいことです。

……今月の孤立……3年前だったら恐怖でおののいたに違いありません。うつ状態に支配されるのをいつも私は恐れていました。でもそれは昔のことです。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1925年9月1日、ペーニャ・ブランカにて

コチティに行かねばならないようです。頼んでいたインディアンは来たのですが、彼は知識が足りません。コチティに行って、そこにいる年長者に会ってほしいというのです。そして、彼が通訳をすと言っています。リオ・グランデのプエブロでみんなが話しているタブーについて、彼は全く知らないようです。でももちろん、彼にそのことは言いませんでした。「民話だけ」聞きたいと言っても、全然問題ないと言っています。ズニでそんなことを言ったら大変なことになります。エルシーはいつも壁にぶちあたる話しをするし、パパ・フランツもコチティで同じ経験をしたと言っていました。私はぶち当たることはないみたいです。まあ、様子を見てみましょう。明日の午後準備をして、インディアンがカートを運転し、リオ・グランデを横断するつもりです。

『ポエトリー』の雑誌を郵送します。フランク・ミタルスキーが書いたものをもっと探さねばなりません。彼の作品はとてつもなく質がいいです。その他のことをいえば、ジョージ・ディロンの詩は『メジャー』に載ったものよりレベルが低いように思います。でも“Compliment to Mariners” (?) は読む価値があります。最近、つまらないものが多いです。——彼女²¹⁾は私が去年ニューヨークから送った詩をやっと送り返してきました。彼女が選んだ“Moth Wing”も採用してくれませんでした。“You have looked upon the Sun”が一番好きだそうです。

[カリフォルニア、バークレーのジェーム・デ・オングロ

からルース・ベネディクトへ]

1925年5月19日

親愛なルースへ

私のタオスの資料は純粋に言語学的なもので民俗学的価値はありません。

インフォーマントを見つけるのを手伝ってほしいという件ですが、あなたが言う「アメリカの安全なところにインフォーマントを連れていけたら……」とか、「民話や儀式について話してくれるインフォーマント」……ああ、ルース、これらの言葉がどれほど私を傷つけたかお分かりにならないと思います。どのようにあなたに説明すればいいのかわかりません。というのはあなたに対して誠実な気持ちを持っているからです。でもあなたが言うことこそがインディアンを殺しているということがお分かりになりませんか。本当にそう思います。それはまず、彼らを精神的に殺すことになります。彼らにとっては精神的なものと同体的なものは、私たちの

文化のそれよりもっと絡み合っているため、精神的な死は、肉体的な死につながります。彼らは横たわって、死んでしまいます。あなたたちのような強い好奇心と科学的データを求めるような文化人類学者がそういった死をもたらすのです。

文化には、秘密にしておくことで心理的価値が与えられるものがあるということをおあなたはわかりにならないのでしょうか。あなたならそれをおわかりになると思います。でもあなたがやっていることにそれを結びつけたことがないのだと思います。あなたには分析心理学の知識があるので、ある種のことは人目にさらすべきではないことはご理解いただけると思います。そんなことをすれば、引き抜かれた植物のように枯れて、死んでしまいます。

ルース、あなたはインディアンと暮らしたことがないのですか。どうなのかわからないので、お聞きするのです。あなたが原始宗教に興味を持つのは、あなたが認めていない心の奥底にある神秘主義に対する興味からですか。どうなのでしょう。私の頭のなかで、あなたはエドナと強く結びついています。生前のエドナがそうであったように、彼女は私の頭のなかにまだ存在し続けています。だから私はこんな変な話し方をするのです。なぜならあなたの気持ちを傷つけないからです。パーソンズ夫人だったらどうでもいいのです。彼女、あるいは他の文化人類学者がタオス族や他のプエブロ族の秘密を掘り出して書いたら、すぐに彼女と彼女のインフォーマントのことを長老たちに言いつけます。でもあなたのことは告発できません。そうすることは私の心が痛めるからです。

どうしてそのようなことが知りたいのですか。もちろんあなたが実際の秘密を絶対に出版しないとお約束してくだされば、あなたのためならどんなことでもします。すべてのことの意味について私が知っていることは、あなたにお教えします。ある程度のことを差し控えて、一般的なことを話すことはいいと思います。秘密の知識を扱うときには絶えず注意が必要です。それは雷と同じ位力があり、危険を伴います。未熟な精神分析者が患者に与える害をみてごらんなさい。儀式の実際の詳細は絶対に語ってはいけません。それは信者の細胞が皮膚の一部であるのと同じように、儀式は信者の心の一部なのです。儀式は彼らの一部なのです。そして儀式は秘密の社会のメンバーにとって本当に意味があり、価値があるのです。それを彼らから盗んではいけません。彼らの家にこっそり入ってはいけません。私の子どもをおびき寄せて、私の家の秘密を語らせるなどといったことは、あなたはしませんよね。

その意味があなたにはわかりませんか。ヨーロッパでは、私たちは先祖の霊を通して母なる大地に戻ることができます。その霊は土に宿り、木に宿り、岩に宿ります。アメリカの土はインディアンの亡霊でいっぱいです。アメリカ人は、インディアンが彼らの精神的な先祖であることを認めない限り、精神的安定性は得られません。エジプトの父なる太陽は、いまだにすべてのヨーロッパ人の無意識な心理において生きた象徴です。過去から連綿とつながっている有機的文化を通して、エジプトの父なる太陽は、生きたシンボルとして現在のヨーロッパ人のなかにいまだに存在しているのです。アメリカ・インディアンの父なる太陽（それはエジプトの

父なる太陽とは全く異なる人物である)のみが、白人のアメリカの父になり得るのです。それがインディアンが残した遺産なのです。しかしあなたがインディアンを殺すことによって、そのメッセージが失われてしまい、白人のアメリカ人にそのメッセージを理解してもらえなくなってしまうのです。インディアンの精神的性格を引っ掻き回すことによって、あなたはインディアンを殺してしまいます。それは、彼らをピストルで殺すのと同じ位確かな死です。

私の心にあったことを述べました。あなたにとってはたわごとかもしれません。笑ってくださった方が傷つくよりましです。

6月1日に出発します。交通手段はシボレーのトラックの荷台に幌をつけたような乗り物です。まずポモにいる友人を訪問します。そして夏のほとんどはアヒュマウィ (Achumawis) 族といっしょに過ごします。それから砂漠を横断してタオ族のところに行きます。連絡を取り合いましょう。一緒に過ごす時間があるかもしれません。ひょっとしたら、タオスで。私たちといえども白人はプエブロに住むことは許されないと思います。ぜひあなたにも一緒に来ていただきたいのです。インディアンの本当の生活を異なった観点からお見せすることができると思います。私は文化人類学者ではありませんが、私は半分あるいはそれ以上がインディアンです。

クーシングがズニを殺したことを忘れないでください。パーソンズ夫人はサントドミンゴの人たちを殺しにかかっていますが、幸いなことにサントドミンゴの人たちは、今では防衛心が強くなっています。

[ルース・ベネディクトからニューヨークの
マーガレット・ミードへ]

1930年8月13日

ジェーミーが来ていました。ある晩、夜中過ぎまでウイスキー・ソーダを飲みながら語り明かしました。これまでもずっと彼に好感を抱いていましたが、今もそうです。彼は色々な迫害を受けていますが、それにもかかわらず、親切で情熱をもって人のことを話し、何よりもナンスが仕事に復帰し、言語学に返り咲くことを望んでいます。今彼はハンブルグの会議に向かっています。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1925年9月2日、ペーニャ・ブランカにて

インディアンの車で川を渡らせてもらうのを待っています。まだ7時30分なのに砂漠のように暑いです。……

9月3日、コチティにて

車が来て、川を渡ってこの静かでチャーミングなプエブロに着きました。ペーニャ・ブランカの山で多くの時間を費やすことができよかったです。というのはここでは山が近すぎて見

ることができないからです。私の家のとなりにはキバ（訳者注：祭事が行われる場所）があり、それは半分地下にあるので、梯子が空に向かって立てかけてあります。家の片側には階段があります。とてもきれいです。多くの家の前にはアカシアの蔦がはり、その下に座ることができます。ポーチも木で覆われており、その葉っぱも家と同じ色に染まっています。ズニでは雨が降りそうな時以外、外に座ることはありません。なぜならズニ族にとって日陰というものは良いものではないからです。

この家で不自由なことがいくつかあります。食事はちょっと不自由です。なぜならここにはミルクもパンもないからです。ご飯とレーズンを主食にすることに決め、店に行けば缶のスープも手に入ります。もう少し日が経つと、インディアンに食事の用意をしてもらうようになりますので、彼らといっしょにトウモロコシを食べることになります。——一番不自由なことはいつものことです。それをまだコントロールできていません。家は年老いたインディアンから借りており、このインディアンは昔々、カーリスを卒業した人で、かなりきちんとした英語を話します。最初の晩に、彼は私に別れを告げ、こう言いました。「友よ、少し虫に悩まされるでしょう。ここには虫はいないけれど、近所の人たちが裏庭で鶏を飼っており、一週間か二週間か前に来たときはひどいものでした。床の割れ目のところにうじゃうじゃいました。」だから、彼が出ていったらすぐに枕やシーツを背中に背負って、梯子で屋根に登りました。その方がずっとよかったです、日中でも心休まるときがありません。

彼らがどうしてこんなあけっぴろげに話をしてくれるのかわかりません。他の人たちの前でそれを秘密にしようとしている気配は全くありません。インフォーマントを連れてコチティから100マイル以内のところに行くとしたら、コチティに足を踏みいれない方がいいとボアズ博士は言っていました。でもズニ族の間ではそんな強い感情は全く見られません。もちろん話してくれる民話はあまり秘密めいたものではないのですが、彼らと長いこと話していれば、そういったことも話してくれるに違いありません。エルシーやボアズ博士がいつも言っているように、トゲがある危険な壁があるという感覚は得られません。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1925年9月5日、コチティにて

私のインフォーマントである老人は、日曜日は働かないのでのんびりとスケッチしています。東プエブロのあちこちで、このような意地悪なカトリック的なものが現われます。でも、ペーニャ・ブランカでのゆったりとした時間とはかなり違ってきます。なぜなら男性のお客や母親のお客、そして私がお菓子を持っていると聞いた何人もの子どもたち、またこの家の家族が川を渡った向こうの牧場から毎日何度もやってきます。明日は踊りもあります。でもあまり期待していません。その踊りを彼らは「若い馬のダンス」と呼びます。広場に四つの柱を立てたようです。おそらく馬をつなぐ柱なのでしょう！

食べられるものが増えてきています。この土地で小麦粉が知られているとは思わなかったの
で、それを売っているとは知りませんでした。地元の人が“stores”と呼ぶところの二軒のうち
の一軒で Aunt Jemima のパンケーキのもとを見つけ、助かりました。私のマフィンはとてもお
いしいです。でもペーニャ・ブランカのバターでさえ食べられるようなものではないので、バ
ターなしのマフィンを食べるのに慣れました。

インフォーマントのおじいさんは90歳で、かなり個性がある人です。若い頃は白人の女の子
のように金髪だったに違いありません。彼はこのあたりでは、金髪（ブロンド）の人として知
られています。スペイン語を上手に話し、彼が話しを理解することができます。通訳に頼らざ
るを得ないことには腹が立ちますが、必要なのです。おじいさんは杖をつき、足をひきずり、
ほとんど二つ折れのように腰が曲がっています。それでもこの辺りでは一番際立った人です。
彼は何に対しても情熱を持っており、誰がいっしょでも楽しめる人です。その性格はおそらく
彼に白い肌を与えた先祖から受け継いだと思われる。でも、彼は自分が混血だとは考えてい
ません。彼によると、私の通訳はナンベ族だそうです。おじいさんの奥さんのひいおばあさん
のおかあさんがナンベ族だったそうです。だから自分が純血だと思っているのは、家系に興味
がないからではないようです。

Antic Hay を読み終わりました。お持ちかどうか覚えていません。私はこれをサンタフェの
図書館で買いました。この時期に、そしてこの季節に読むにはぴったりでした。文明の便利な
ものから離れていて、それを恋しがってる人だけが読むべき本かもしれません。さらさら流れ
る小川のような内容です。この本からの教訓は、決して偉大なものではないのですが、私にと
ってこの本は、作者が確信をもって、そして巧妙に高度な知識がいかに無意味かを示したこ
とにあります。

同じ図書館からドゥ・ラ・メヤーの *Come Hither* を借りてきました。この本を子供にあげて
も変に思われなような人を知っていればいいのに、と思います。英語の詩の分野でも、いま
だに発見されていない国の詩があるということに久しぶりに気づかせてくれた最初の詩集です。
この英語の *Maying Songs*²²⁾……フランス語、あるいはロシア語ができて、これらの詩がわかれ
ばいいのに。まだ発見されていない重要な国の詩をみつきたいわ。

……この手紙が届く頃にあなたがどのような生活をしているのかしばしば考えます。パゴパゴ
社会の問題とまだ格闘し、パゴパゴ語をどんどん吸収していることと思います。ネーヴァル
(Naval) の社会でも何かおもしろいことがあるといいのですが。ひょっとすると、ネーヴァル
での暮らしは、フィールド・ワークのためのいい準備になるのでは？サモアの赤ん坊の世話を
する方がましだと感じさせてくれるような経験かもしれません。いずれにしても、これからの
フィールド・ワークはあなたの体力すべてを使うのですから、加減をしなければいけませんよ。
自分が泣くことにならないよう、ありとあらゆる方途を尽しなさい。友人をみつけるのは、そ
のうちの一つの手段にしか過ぎません。私は色んなものを考え付きました。泣きそうになった

ら、歯を磨いてうがいをすることから、一年の間、自分が自分の娘のふりをすることまでしました。こんな例をあげたら、他にどんなのがあるか、もう聞かなくてもいいですよ。あなたを助けるために、あなたにもっとはっきりものが見えるようにアドバイスをしたり、理屈を言ったりする必要はないと思います。もうあなたには、そういったものが備わっているのだから。神の恵みがありますように。……そしてあなたの人生がうまくいきますように。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1925年9月8日、コチティにて

ここ何日間か、あなたが言う原住民のような生き方がどんなものか十分に味わう経験をしました。ニューヨークの隠遁者には、その賑やかさは想像だにできないでしょう。もしかすれば——はないかもしれませんが、——給料を支払うインフォーマントの他に、でもその代わりに、多くの群衆の真っ只中に絶えずいるわけです。外に水を取りに行くと、すぐさま男の人たちが入ってきます。私に好意をもっている一人の男の人がいるのです。その人はいい人なのですが、追い払いました。目を見張るような、とろけるような目をしたいい男で、相当な自信家なので、おそらく過去に白人の女の人を手に入れたことによる自信かと思われまふ。彼は私がメーベル・ドッジのような人であることを願っているようです。メーベル・ドッジのご主人のトニーの役になろうとしているようですが、トニー²³よりいい男だと思ひます。私の家の木の下で私といっしょに横になったらご褒美を上げるよと言って小さな女の子を招き入れた日に、私の手に6回続けて情熱的にキスをしたら、あなたにとって私はまったく興味の対照ではなくなりますよとトニーに言うと、彼はそれをまともに受け取りました。それから最近二度目の結婚をした陽気な男の子がいて、マドリンが冬の間に住む部屋に座りにやってきます。マドリンは私のホスト・ファミリーの20歳の未婚の娘で、学校で教えています。それから私に物語を語ってくれるとてもにぎやかな老人がいて、彼はスペイン系アメリカ人の気質を移植されたような人です。それにももちろん女の人たちもいますが、彼女たちはみんな似たり寄ったりです。

コチティのすべての人が私の職業を知っているようで、「今日はおじさんの話はいかがでした？」と聞いてきます。おじいさんが二日間病気で、今日はおばあさんが話をしてくれました。おばあさんのことも気に入っています。インフォーマントになりたいという人が二人現われたので、その人たちにも何とか参加してもらおうと思っています。特に一人は秘密の話を知っているようなので。彼らが私の手伝いをするに對する言い訳は、神聖なことは何も教えてはいないということで、これまで聞いた話は、すべて公にされている情報だということです。いづれにしてもこの人たちに頼るしかなく、問題は秘密の話を知っている人を見つけることです。ズニ族とは違ひ、それは一般的な知識ではありません。ハルセス氏が勧めてくれた二人の男性は一般的な伝説さえも知りませんでした。ズニ族のように、来る夜も来る夜も物語を語るといったことはなく、仲間や僧侶の集まりはほとんど存在しません。しかも話し手に対する支払い

額は非常に少なく、話してもいいと言われた時に話を聞くことができます。3時間のセッションでたった1ドルです。

生き延びるのに必要な物資は着々と届いていることをお知らせしておきます。Aunt Jemima パンケーキの素に頼っていますが、週に一度のお楽しみとして、ペーニャ・ブランカからパンが届きます。注文した殺虫剤が届いて、それを噴霧した所からシラミがいなくなりました。夕べは午後のひどい雨の後にベッドに寝ましたが、大丈夫でした。

昨日の郵便で受けた大きなショックについてお知らせしなければなりません。キャサリーン・ラッセル²⁴⁾が、急にポートランド・オレゴンに引越することになり、ずっとそこにいることになるそうです。彼女が来てくれれば問題の素晴らしい解決になったんですが、それは叶いませんでした。ここにいて考えられる唯一の解決法は、一年間のお金すべてを使って5ヶ月間フルタイムの速記者を雇い、残りの7ヶ月間のお金は自分で払って物語を記録してもらうことです。でも私が望むことすべてを彼女にやってもらうためには、相当速記が速くなければならぬので、お金が無駄になるかもしれません。そしてジャーナル²⁵⁾からもらう小切手は速記者に使うではなく、単に記録をとる人に使うことができるかもしれませんね。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1925年9月13日、コチティにて

先週どうしてあんなことを書いたのかわかりません²⁶⁾。“For Seed Bearing”²⁷⁾の詩を読んで、エドワードは play-girl を思い浮かべるでしょう。あなたは思い浮かべないわよね？私が言おうとしていることは全く反対のことで、「魂のなかでどんどん大きくなる苦悩」ではなく、私が伝えたいのは、心が傷ついた後、突き放されて自分一人になってしまった時の時間のことなのです。私の頭の中では、その姿は鮮明なのですが、それをはっきりと詩であらわすことができたかどうかわかりません。今つらいのは、詩で書いた言葉が新鮮なうちにあなたのコメントがもたえないことです。

民話は大量に増えています。この調査では秘密の話が得られないことはほぼ確実です。また来なければならないです。でも二度目は簡単です。集会の時に、村中の人たちが私の隣に座ろうとします。ジョーは貧しい人にお金を配るように、私との調査のための番号札をみんなに配布しています。老いたシャーマンはお金がほしくなかったら彼がやっていることを嫌がるでしょう。シャーマンは貧しい女の子からお金を取り上げるような人です。一番優秀な通訳者は、夫が裕福なので、彼女が働くのは禁止されています。土曜日は出かけて、日曜日はキャサリーン・ブレナーと過ごそうと思います。この「カトリック」の村では、日曜日にいいことはありません。今日、みんなはサンタ・ドミンゴヘダンスに行きました。カッチーナがいるので、白人は禁止です。人気がないエブロ^{ひとけ}に滞在しました。お昼まで寝ていて、一日中、一人ぼっちでした。自分のことがわからなくなってしまいました。

あなたの手紙は木曜日の郵便でハワイから届きました。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1925年9月16日、コチティにて

寝る前の数分間を使って、あなたに手紙を書きます。本当なら電気をもう消さないと明日の日の出時間に来訪者を迎える準備ができないのだけど。この人たちは皆、その時間にやってきます。今夜の最後のインフォーマントは8時まで帰らなかったで、それまで夕飯の支度ができませんでした。こんなふうのんびりする時間はなくなりました。これまでの10日間、日曜日を除いて毎日9時間の書き取りをずっと続けています。かなりの量です。でも一番興味がある話、つまりカッチーナの話は得ることができません。この話しではなく、ズニの話が何千ページもあってよかったです。ズニの話はズニ族の習慣や宗教のことがそのまま豊かに描かれているけれど、この話はここの人々の遊びだけで、習慣も宗教も含まれていません。思ったよりこりオ・グランデでは文化の崩壊が進んでいます。ズニ文化も同じように消えてしまう前に資料が手に入れられたことを今まで以上にありがたく思います。

今日は水曜日で、土曜日に発ちます。帰路に着くことができうれしいです。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1925年9月25日、シカゴ近くでB & O列車にて

昨日の夜はエドワードと過ごしました。彼のお母さんと子どもと夕食をともにし、私のホテルに彼を連れて帰り、真夜中過ぎまで話を聞きました。……タベ、彼はネメシス（人間の思上がりや憤り、罰する女神）に苦しめられていて、私は彼をそちらの方向に行かないよう止めようと思いました。でも彼いわく、「それは羨望であって、羨望なしには生きて行けない。それをみんなにわかってもらいたい」ということです。でも彼は絶えず、そこに戻ってしまい、まるでそれをモーゼの十戒のように扱います。彼は色々なイメージをもっています。たとえば、人生はすべてのものを総括して一つの調和した生育であらねばならないとか、物事がバラバラのカプセルに入っているはいけないとか、その他にも多くのイメージを抱えています。あなたがかなり以前に気づいていた通り、それは彼の奥底に根付いているものです…

……彼はあなたが最初のサモアの船で書いた手紙を持っていたので、ニューズ・レターと詩の本のことが書いてある紙片を読みました。船酔いで陸に上がっても気分が悪かったですか。……

彼は少し痩せたみたいだけど、気はしっかりしているし、大丈夫だと思います。シカゴが気に入るかどうかわからないようです。彼がこれほどまでに直面した問題に真摯に取り組む姿を見たことはありません。……

エドワードの本²⁸⁾の章の順序に関するあなたの提案はいいと思いました。でも電車で読んだ

だけで、原稿を見たわけではありません。

〔ルース・フルトン・ベネディクトから

マーガレット・ミードへ〕

1926年3月5日

昨日、マリノフスキーと楽しく過ごしました。彼は突然ランチに現われたのです。誰も彼がここにいるとは知らなかったのですが、私といっしょに午後を過ごしたいと言ってきたそうです。ラディンが夕食に来て、その後マリノフスキーはラディンの「授業」に出席したのですが、ラディンがディスカッションでみんなの意見を聞いたところ、マリノフスキーが会話を独占してしまっただけです。きっとあなたはマリノフスキーのことが気に入ると思います。彼は頭の回転が速く、毎日一緒にいても楽しくなるようなウィットに富んでいます。文化適応によってあまりにも大きな違いが生じるので、ある文化特性がその場しのぎのものであるか、外部から入ってきたものであるかはあまり重要ではないという点にマリノフスキーは気づき、それを新しい宗教のように信じています。私たちがパパ・フランツのおかげであたり前だと思ってきたことを、彼のように頭がいい人が今頃気がつき、興奮しているのを見るのはとても興味深いです。もう少し時が経てばその文化で独自につくられたものや伝播は、全体像を変えていくというところにマリノフスキーは気がつくことでしょう。もちろん彼は新たに「つくられたもの」などは存在しないという前提に立っており、それはゆっくり定着するものであるが由に外から借用されたのか、あるいは独自に存在したものなのか判別しがたいと言うでしょう。もちろん彼は正しいのですが、自分の言いたいことをはっきりさせるために、文化特性の派生の問題を文化の特徴、そして文化内の特徴の変化、また外部からの刺激などから切り離して考えているとはっきり述べるべきです。でも、新しい宗教を見つけたばかりの人に、自分が見過ごしてしまったことを具体的に記述させるなんてことはできないですよ。

精神分析に関してマリノフスキーは、パパ・フランツと同じ位猜疑心が強いです。まあ、パパ・フランツほどではないですが、それに近いです。マリノフスキーに言わせると、精神分析を奨励するのは極端な考えをもった人たちだけだそうです。精神分析の価値ある部分は、一般心理学に取り入れられているということです。そう言うのは簡単なことですが、その言い方は精神分析が否定されていた時代に実際には彼らが正しかったこと、そして今回も正しいかもしれないことを無視した言い方です。いずれにしても、オーソドックスな考え方をする人は、マリノフスキーの研究には目もくれないでしょう。マリノフスキーとパパ・フランツは好きなだけ同意すればいいわ。ラディンは一晩中怒っていました。ラディンは私にエリオット・スミスなどからいいところを見つけなさいと一年中言い続け、また偉大なるユングからもいいところを見つけなさいといい続けています。こんな素晴らしい同士を見方に持つことは何とも素晴らしいことです。何しろラディンは私がボアズについて解説するのを忌み嫌っていました。マリ

ノフスキーは反対にそれを聞くのが好きで、その通りだと言っていました。マリノフスキーは、ボアズが常に自分の精神的父親にあたることを知っていたなら、と言っていました。そして私にこう言いました。「過去20年に渡ってボアズがあなたに教えたいろいろなことを自分に教えて下さい。さもなければ自分が発見したことを、過去においてだれかが発見していたことを知らずにまるで自分が発見したかのように言ってしまいますから。」

マリノフスキーと話していた夜、マリノフスキーはわざとラディンを無視していました。ラディンに対して彼は明らかに好意をもっているはずなのですが、でもとても楽しい時間でした。私たちはみんな熱烈な伝播主義者にみえたかもしれません。ボアズの考え方と機械的な解釈をみんなが論破するのではないかと思っていました。海外ではそういう考えを持った人がたくさんいるような気がします。でも「ジェイコブの仲間」²⁹⁾の若い連中に会う時は、いつも文化人類学のような固い話をするといい状況ではありません。

私が思ったとおり、セミナーはとてもむずかしくなりそうです。伝播主義の考え方についてバカな議論をしたのですが、その時、ボアズ博士の業績も話題の一つになりました。私が指摘したことは、伝播研究の目的は私たちに問題提示をすることであり、問題解決の方法を提示することではないということです。ボアズ博士は、気分がいい時には自分でも同じことを言っていました。そうでない時にはこれに悩まされていました。そのような状況のなか、今週クラインバーグが神話の精神分析学を用いた分析を発表しました。クラインバーグを覚えていますか。整った顔だちの心理学をやっている、とてもきちんとした考え方の男の子です。私は彼になるべくやんわりと報告するように言ったのですが、彼は最初どんなに努力しても不可能だと言っていました。でも、マリノフスキーの説得に私たちがでっち上げたことを加えることで、クラインバーグの報告は非常に興味深いものとなりました。ボアズはこれをすべて受け入れるでしょうが、用語は受け入れられないでしょう。でもそれを受け入れなければ、すべてを否定することになります。ボアズは抑圧について論じたりしません。ボアズは、人は自分たちの文化のタブーを茶化す傾向があるとは言うけれど、それが自分たちの恥かしさを隠すための行動だとは言いたがりません。そこまで言うのは彼の主義に反しているからです。とてもおもしろい論議になり、ボアズも興奮していました。それ以来、このことについては話していませんが、ゴダードによれば、ボアズは色々刺激を受けたようです。とても興味深いことですね。

〔ベネディクトからアドミラティ諸島へ赴く途上の

マーガレット・ミードへ〕

1928年9月21日、ニューヨークにて

学会で大きな問題³⁰⁾は起きませんでした。あのいつも不機嫌なパパ・フランツでさえ初日から楽しんでいるようで、特に問題は起きませんでした。ボゴラスは1902年の学会でワシントンの大統領と握手をしたこと、そして南西の砂漠に連れて行かれて、シャベルを与えられ、掘り

当てたものは何でも持って帰っていいといわれたことを言いふらしていました。色々なものが「埋められており」、「何世紀も埋まっていたもの」を貰ったことについて長々と話していました。まるで墓荒らしだと言っていました。とは言っていたけれど、彼は穏やかな人で、埋まった土器をくれとか、カルヴィン・クーリッジ大統領と握手をしたいなどといった無理な要求はしませんでした。デイヴィッドは大いに役立っており、パーティに出席したり、外国人に愛嬌を振りまいたりして、楽しんでいるようでした。

今日までエドワード（筆者注：サピアのこと）によく会っていました。今日彼は休みです。ある晩、公園のベンチで話しました。彼は嫉妬について（想像がつくでしょう）2、3時間話し続けました。嫉妬は深い愛の裏返しであり、愛の深さは嫉妬の深さで測るということに対して私が同意しなかったため、私を否定し、会話を中断するほどでした。自分の人生の詳細を語りたくなかったので、最後に彼をなだめるために、私はそんな試練を受けたことがないのでわからない、と言いました。でも彼は自分の神聖な考え方を理解してもらえなかったことに対して、執拗に語っていました。……

……もう少しさかのぼって説明しなければなりません。開会式で目立ったことは、パパ・フランツが計画したとおりオズボーンが脇役を務めました。オズボーンの事務所から当日の朝連絡があり、まず会長が開会の言葉を言わなければならないと言ってきたようです。みんなが着席すると、孤立無援のパパ・フランツが立ち上がりました。こんなふうにはオズボーンの虎の威³¹⁾を借りて格好をつけるパパ・フランツは好きではありません。でも開会式ではひとついいことがありました。オズボーンが「…そして、私には虚栄心が全くありません…」と悠然と言ったことです。あの親愛なるペンツク博士からパパ・フランツに対する素晴らしい賛辞がおくられました。ペンツク博士は世界を愛するいつもにこやかな人で、自分の心音を聴くかのようにしっかり周りを見る人です。彼はフランツ・ボアズのことをドイツ生まれの偉大な文化人類学者と呼び、「ドイツからアメリカへの最高の贈り物だ」と言っていました。とてもよかったです。……

……でも公式のディナーでブッシュマンは外国からのお客様に対して重要な役割を果たしました。とても盛大でした。私はボゴラスのとなりに座り、彼は革命とロシア文学について話していました。彼が感動したときに見せる微笑は見たことがないほど美しいものでした。……
……これまでもボゴラスとはいい話し合いをしたことがあります。彼は、「新しい夜明け」でいっぱい、子どものような確信を持っている人です。彼によれば、今後人間は、状況に流される恐れがなくなり、解放され、新しく生まれ変わるそうです。もちろんそうになると、昔の古典文学を楽しむことができなくなるのですが、ドストエフスキーもちょっと古いし、トルストイとツルゲーネフもすでに消えています。でもチエホフはそのまままだそうです。他に誰が残っていると言ったと思う？ 当てるまで100回チャンスをあげるわ。アナトール・フランスですって。私は驚愕しました。レッド・リリーを例に出したら、たしかにレッド・リリーは自分の考

え方を示すのにいい例ではないと認めました。彼に言わせると、彼の考え方はロシアの知識人の一般的な意見のようです。それから学会にはタルピツァーもいました。彼は老けて、何かを恐れているような感じでした。非常に忍耐強いキリストの学者版のような人で、私と話すのが好きなようです。

……論文の方にも取り掛かると思います。グルーブナーのためにコパーズも来て講演をします。コパーズが話している時いつも私が思うのは、彼といっしょに懺悔に行きたいということです。彼は自信家だし、おそらく忌まわしいくらい独断的なんだと思いますが、この国ではなかなか見られない威厳もっています。クローバーは必ずコパーズやユールや、ユールのあとやキャピタンの論文のあと立ち上がり、みんな賛成だという短い演説をします。するとパパ・フランツが立ち上がり、「しかし、基本的な違いがあるように思える」と言い、それについて長々と説明するのです。私の論文³²⁾に対しては多くの人が興味を示しました。プログラムのなかのとてもいい順番で発表できました。ハイエ博物館で昼食会が開かれる直前という順番でした。クローバーの質問は、「ボアズはそういう論文をどのように受け止めるんですか」というものでした。エドワードはととてもいい講義で、いいポイントをつけていると言ってくれました。キダーは、プエプロの宗教だけではなく、芸術や物質的文化の例が多く散りばめられている論文だと言ってくれました。ウイスラーは、私が話している間中、しかめっ面をしていて、その後姿を見ていません。エルシーはあっけにとられ、やっとなを直すと無意味なことを口走っていました。ハンブルグから来て、グラディスのところに滞在しているダンツェル教授は、私の論文がこの学会で最も重要な発表で、自分の研究とも一致していると言っていました。パウダーメーカー氏からも同じコメントがありました。20分以内に発表しなければならなかったのに、大雑把にしか説明できませんでしたが、限られた時間内で言うべきことは言えたと思います。……「聖体」が今週の『ネーション誌』³³⁾にやっとな掲載されました。そして著者リストに何と書いてあったかという、あからさまに「アン・シングルトンはペンネーム」とされていました。あいつらめ！かわいそうなアン・シングルトンについてとやかく言わずに私の詩を一行でも出版してくれる編集長はいないのでしょうか。こういうことをされるたびに、なぜこうも感情的になるのかわかりません。まるで、自分が犯された感があります。どうしてみんなペンネームにこだわるのでしょうか。私がどんなに嫌がるか知っているはずがないのに。……

〔アドミラティ諸島へ途上中のマーガレット・ミードから
ルース・ベネディクトへ〕

1928年10月18日、シドニー、オーストラリアにて

ブラウンはとても変な人です。彼は私の研究を認めてくれています。今日、私の原稿³⁴⁾を読んだ後にお茶を飲みながらこう言いました。これだけアメリカ学派の精神と異なっており、またボアズ教授が不可能だと信じていたような研究をよくやってのけたと。でもボアズ教授が私

の仕事の計画を立てたのだと言い返しました。ロイド・ウォーナーは、ここに来るまでこのような研究はできなかったとブラウンに言ったそうです。それを聞いて私はおかしいと思いました。ロイド・ウォーナーはクローバーの学生だったはずで、クローバーは私の研究テーマに非常に興味を持っており、このようなテーマを扱っている私は非常にラッキーだと言っていました。だからここに来るまでこういった研究ができなかったということはありません。するとブラウンは黙ってしまいました。彼はグレゴリーが私の研究を手に入れることにも反対していたんです。私はブラウンがそう思うように仕向けて、英国で私の本を出版することもほのめかしました。もし彼が今後も私の研究を支持するなら、ケーガン・ポールにそのすべてを送ると思います。最後の部分は付録に入れられるでしょうし、グレゴリーはそれによって何も得ないでしょう。『サモアの思春期』³⁵⁾で用いた理屈を使えば彼のお金に手をつけずに済むはずですから。

ブラウンは、とうとう私がトンガとフィジの親族関係の制度をサモアの村落の制度と比較しているとまで言い出しました。怒りのあまり今朝私に対して礼儀もわきまえず、フィールド・ワークから帰ったばかりのエルキンを私に紹介もしませんでした。私の本はアメリカの方が受け入れられるでしょうから、イギリスではなくアメリカで出版すべきだと皮肉たっぷりに言ったのです。私を批判していることはわかったのですが、その理由は今日の午後までわかりませんでした。彼は上から目線でトンガとフィジとサモアの共通点の方が、違いよりよほどおもしろいと言いました。彼は本当に我慢ならない人です。怒ると非常に無礼になり、ふてくされます。……

あの原稿のことが心配です。グレゴリーのために書き直すと平面的になり、悪くなります。何の主張もしないというのは、あまりに退屈です。彼に全部送って、自分の好きなところだけ後で本として出版する権利は確保したいような気がします。そうすると、最初の6章とは違った方法で本を構成することになります。そうになったら、あなたはがっかりしますか。私がサモアに行くか、行かないか決めるまで、グレゴリーは出版を待つべきです。……

ブラウンは自分が声に出した考えすべてを自分の一部とみなし、誰かが間接的に、あるいは直接反対しようものなら、自分をけなされたように受け止めます。……

[マーガレット・ミードからルース・ベネディクトへ]

1928年10月25日、シドニー・オーストラリアにて

以下のものを送ります。

- (a) フリーダ・カーチュウェイ宛のカバーレター付の『ネーション』の記事³⁶⁾
- (b) メンケン宛のカバーレターがついた『マーキュリー』の記事³⁷⁾
- (c) トウイ (Tshi) の記事のカーボンコピーに付け足す2ページのカーボンコピー³⁸⁾。カミエラが図を描いてくれています。それをここから送り、そのなかに今後の連絡はすべ

てあなた宛にするように指示しておきました。この指示は急いでパパ・フランツのために追加したもので、きちんとタイプはしていません。ブラウンは問題ないとは言っていますが、「もちろん改善の余地はたくさんある」とも言っています。

- (d) 私の原稿の第1章のいくつかの訂正のカーボンコピー
- (e) レオをアメリカに入国させるための労働省への嘆願書のコピー2通。二人の立会人に宣誓してもらって労働省に送ってもらえますか。労働省はオーストラリアにそれを送り返すことになっているので、その後はあなたのお手を煩わすことはありません。
- (f) レオのフェローシップ申請のための書類。ドブ族の原稿だけは月曜日までにタイプし終わらないので、その原稿は含まれていません³⁹⁾。

〔マーガレット・ミードからルース・ベネディクトへ〕

1928年10月27日、シドニー・オーストラリアにて

夕べ、本⁴⁰⁾が大失敗に終わり、出版社も出版を停止し、その上『マヌアの社会組織』の出版社があなたへの謝辞を入れ忘れた夢をみました。それがどういう意味かわかっています——私はこの本⁴¹⁾に満足していないということです。本に手を入れる時間がなかったのです。ブラウンがやっこの本について批判すべき点は何もないと言いました。——この資料でやれるだけのことはやっと思ったと思います。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1928年12月29日

ディオニソスの・アポロ的南西インディアン⁴²⁾の論文を書き終わり、提出しました。あなたへのコピーもあるのですが、エルシーのところに入れてきました。エルシーは丁寧に原稿を読んでくれ、いくつか提案してくれました。彼女のコメントは、とてもいい論文であること、そして彼女が修正した部分は追加点だけであり、考え方は私に同意しているということです。エルシーにとっては異質な内容なのに彼女を説得できてうれしいです。

〔ルース・ベネディクトから

ニューギニアのマーガレット・ミードへ〕

1929年1月16日

……『センチュリー』誌⁴³⁾の原稿を書き終わりました。しかも期限内に。パパ・フランツに見せる時間もありました。パパ・フランツにこの原稿とSW論文⁴⁴⁾とアニミズムの論文⁴⁵⁾を渡しました。1ヵ所について話がしたいと言われ、震えてしまいました。『センチュリー』誌の記事はおそらくお気に召さないと思いますと言ったのですが、全然違っており、私が書いた方が自分の書いた本よりもっと役に立つと考えておられ、自分が私のように文章が書けたらと思った

そうですが、自分には書けないとも思ったようです。そして私と話し合いたかった点は、アニミズムの論文のなかで私が科学は魔法から生まれることはないと言った箇所についてでした！彼らの視点では、魔法から科学が生まれ得るのだというのが、パパ・フランツの考え方でした。SWの論文に関してもほめていただきました。……

〔ルース・ベネディクトから

アドミラティ諸島滞在中のレオ・フォーチュンへ〕

1929年1月10日

ドブ族⁴⁶⁾の資料、非常に興味深く拝見しました。2時間ほど読んだあと、彼らはみんな悪魔に魂を売っているように感じました。あなたはどのようにして耐えられたのですか。ある制度化された恐怖から常に逃れるための理屈を彼らはいくつも持っているのでしょうか。そしてそれは人間関係にどのような影響を与えるのでしょうか——そして家族の団欒の場でも相手を敵視し、グルになっていると考えるのでしょうか。

クラの環に関するあなたの説明、感銘しました。そして受胎の理論を一般的な文化の慣例の一部として扱った点がよかったですと思います。私たちの行動とは全く違う例として、こんなによいものは考えられないほどです。

昨日、ボアズ博士は1929年から30年の前半はコロンビア大学にいないかもしれないと話していました。次のサバティカルまでもう少し待たなければならないのですが、10月になればそれが取れることを彼は知っています。間髪をいれずに決断できたら、もう1回フィールドワークができると考えています。彼は不屈の人です。彼のことだから、たぶんそうすると思いますが、まだ確定していません。学部が移ることになっているヘーヴマイヤー・ホールの一部が今学期完成したら、すべてが予定通り実行されることを見届けるために彼は残るでしょう。でも1月の終わりまでに帰ってきたら、引っ越しには十分間に合うはずですよ。もしボアズ博士が仕切っていなかったら、「学部なし」と電報を打ってくれとマーガレットは言っていました。でもしばらくは一つのコミットすることはないと思います。夏にヨーロッパに行く時までは、そういったことはしないでしょ。

〔レオ・フォーチュンからルース・ベネディクトへ〕

1929年5月3日、ペレ（アドミラティ諸島）にて

フェローシップ⁴⁸⁾のことで親切にいただきありがとうございます。ドブ族の資料には私が入れたかった資料の多くが抜けています⁴⁹⁾。

いいえ、制度化された恐怖から逃れるための理屈を彼らも持っているわけではありません。彼らは相手に対する不信感を絶えずもっており、(毒を盛られているという恐怖のため)ほんの少数の信用できる人からしか食べ物を受け取りません。魔術師の少年マロバは必要であれば食

べ物に入れられるように毒の肝を持った魚をいつも茂みに隠し持っていました。（私がいる間は少なくとも）そうしていました。家族の食事では、夫と妻と一緒に食べているのを見たことはありません。休むときは、夫は家のベランダを陣取り、妻は家の下に陣を取っていました。ベランダで夫の隣に座ることは許されませんでした。日中、家のなかは病気、あるいは寝るためにしか使われませんでした。日没の20分ほど前に泳ぐことに対する警告は何度もされて、坂を下りて一緒にビーチまでつきあってくれる人はいませんでした。夜になっても恐怖が少なくなることはなく、近所の人たちの恐怖も減ることはありませんでした。日中は肉体的な恐怖があり、夜には霊的な恐怖があります。はっきりとした区別はないのですが。

『A・マクリーシュのハムレット』（Hamlet of A. MacLeish）、本当にありがとう。大変気に入りました。エリオットが書いたものより気に入りました。特に7章目、9章目、12章目の文章です。すべてがうまく形成されています。マクリーシュはおしまいの方よりも、9章目の文章の内容をより強く伝えたかったようです。

“fight with a shining foil the feigned 輝く金属をもって一杯のビールのために
Antagonist for stoops of beer” 偽善的反抗者と戦わねばならない

この部分の表現はマイナーな点とされていますが、詩における重要な部分とした方がいいでしょう。彼は鋭くもセックスに対する哲学的、文化的疑問（自分ののではないのですが）を匂わせていますが、それほど心に迫るものでもありません。しかし、彼の手法が好きで、彼の言葉遣いが頭のなかで何度もよみがえります。

圧倒的プレッシャーのなかの原始社会から抜け出すのを楽しみにしています。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1929年1月30日

膨大な *Encyclopedia of the Social Sciences* 『社会科学の百科事典』の“child marriage”「若年結婚」のなかの原始社会の部分の原稿依頼がアルヴィン・ジョンソンからあなたにきていました。原稿の長さは忘れましたが、第Ⅱ巻として4月1日に発行されるものです。残念ですが、お受けできないと書きました。もし教育の部分の原稿依頼なら、原稿が遅れたとしても正当な理由があるので出版社も待ってくれると思うのですが、若年婚の部分ではそうはいかないと思うので、図書館が使えなければまず無理だと思いました。いずれにしても今後何巻も続く事典なので、最初の投稿がうまくいかなかったら、あなたも嫌がるだろうと思って断りました。……

〔オマハのインディアン居留地のマーガレット・ミードから

ルース・ベネディクトへ〕

1930年7月21日

民族学的にいうと、この仕事はやりがいのないものです。幻視体験がある父親あるいはおじ

さんを見つめ、通訳を連れて8～10マイル運転してその人に会いに行くと、1回目は留守で、2回目は酔っ払っており、3回目は奥さんが病気、4回目は通訳のアドバイスを受けて5ドル払ってインタビューを始めるのですが、その5ドルを受け取ると男はワカンダに感謝をし、ワカンダに長い人生を授けてくれるように祈り、4時間じっと横たわっています。これが通常の手順で、時には何百人もの人の宴会を要求し、それがないと口を開きません。そして時にはワイロを受け取る話も出ます。しかし、彼らはほんの少ししか知識がありません。ほとんどの事柄が年寄りのお父さんの代で終わったようです。実際には行なわれなくても、形だけが残っている長い儀式といものはありませんでした。数少ない興味深いポイント、たとえばお父さんと同じ幻視を体験したということが、どのようにして起きたのかについて検証することはできません。何かを知っている人が話してくれたとしても、ほとんどの場合その状況が普通ではなく、何かを証明するにも実例が少なすぎます。神聖なことを話すと死ぬと信じています。ジョセフ・ラ・フレッシュは、神聖な白いバッハロウで作ったロープについてアリス・フレッチャーに話した10日後に死にました。そして腹が立つのは、彼らが何かを話す時には何の役にも立たないような内容だということです。たとえば一行だけの歌、「私はタバコです。それは私です」といったものです。この文化では内容よりも形を重んじており、それが目に見えるのでそのダイナミズムは研究に値すると思いますが、それを掘り起こして研究するには大変な文化なのです。一人だけの年寄りが言うことには何の価値もありません。……彼らはお金をもっており、無知で話せば死ぬと恐れています。いずれにしても、彼らが知っていることには何の価値もありません。マーブル(ペブル)社会の頭首はカーリスル大学の卒業生です。彼は70歳で……時間とお金の投資に値するのは何だとお思いですか。あなたのお考えをお聞かせください。宴会は時間とお金がかかり、一日中それにかかりきりです。慣習によると、情報を得たい相手全員のために4回、宴会を開かなければなりません。しかもそうした後に何か言ってくれるという保証も、それが真実かどうか検証する術もなく、それを他のことと辻褃を合わせ、全体に組み込む方法もありません。

私たちが甘やかされており、他の人たちより要求が厳しいことはわかっています。でもそれは諸刃の剣で、良くも悪くもなり得ます。その文化で得る価値がありそうなものを大切にすることが私たちにはできます。私がアメリカン・インディアンの専門家になるとしたら、ほとんどの時間を図書館で過ごし、そこで長い間文献を探すことによって得たキーポイントを検証するためにのみ図書館から出るとしています。テキサスのある場所に、インディアンがペヨーテ(サボテン)を採りに来る場所があるということです。あなたのように知識を持った人がそこで4～5週間キャンプすれば、アメリカ中部のすべての種族のインフォーマントが得られるでしょう。……無頓着で非協力的で死に対する恐怖をもっているインフォーマントからお金を払ってまで情報を得たとしても、それは彼らがお父さんやおじいさんから聞いたことで、その内容の真偽についてはチェックする術はありません。このようにして得た情報は、儀式で直接ことばを聞

くのと違って、確実性に乏しいです。たとえば次のようなやりとりになります。「あなたはお父さんと同じ社会に属していますか。」「はい」「その社会の幻視を得たのですか。」「いいえ、私が子どもの時には誰も幻視を得ていません。その頃には、誰も幻視を得ていません。その頃にはすべてが平らかにされており、幻視については誰も語りませんでした。」「あなたとSWとではどちらが年上ですか。」「私の方が年上です。」「えっ、SWは幻視を探しに出かけたそうですよ。」その後、インフォーマントは黙ってしまいました。

この文化では多くの人が自分の息子に幻視を授けることを拒み、授けることなしに死んでしまいます。医者が患者に自分の幻視を伝えた場合、それを誰かに話すと、苦しんで死ぬので絶対に言わないという文化なのです。そして彼らは25ドル以下の支払いでは誘惑されない位お金をもっており、お金を払って何かを話したとしても、真実かどうかチェックする方法はありません。もしかしたら、これはアメリカン・インディアン研究者全員が直面することであり、それをのり越えることで何かを得ているのかもしれませんが、私はそうだとは信じられません。もしこのような資料しかもっていないのなら、それは大した価値はありません。親族関係や社会組織はチェックできるし、物質文明は残っていたら目に見えることです。しかし宗教については詳細な情報がなければならず、父親と息子と何百もの幻視、そしてその幻想をどのように扱ったかという資料が必要です。……

時間経過。もう少し新しい情報。ヘイエから資金を得てギルモアがここにいたのですが、彼は薬草の束ひとつに50ドル払い、必ず歌と幻視の情報をもろうことを強く言い張ることでその重要性を理解させたそうです。そのことがヘイエ博物館に記録されているかどうか、見ていただけませんか。……

私のことを恩知らずだと思わないでください。必要以上に問題を大きくしている私をどうぞ叱ってください。ペヨーテに参加するのに100ドルかかります。それだけの価値があると思いますか。あまり面白くなさそうです。ペヨーテの死の儀式を見ました。この仕事を評価しようとする時、何の価値も見出せないような気がしました。1ヶ月の干ばつの後に、やっと雨が降りました。それがひとつの救いです。

〔アパッチ調査旅行中のルース・ベネディクトから

ニューヨークのマーガレット・ミードへ〕

1931年4月14日

先生⁵⁰⁾はAAの論文⁵¹⁾を読んで気に入りました。強調すべき箇所のみを指摘してくれました。個人対文化よりも、個々の差の幅とその重要性という問題をもっと追究すべきだと言っていました。社会をどのようにコントロールするかといった特定の問題との関連において、個々の違いは特に重要です。そうすると1ページの終わりの文章は「これらの偶然の省略による」ではなく、次のようなものに近いものになるでしょう。つまり「文化の形における個人差とい

う重要な問題から、様々な文明で、文化の色々な側面がいかに多様に形式化されているか、そして形式化されている度合いがより少ない文明の研究方法にいたるまで」というふうに。——それから論文の最後に具体的な問題を示すことによって言いたいことを説明すればいいのではないか、とボアズ博士は提案していました。——たとえば社会をコントロールする問題——それがどの程度厳しいのか、それがどのような方法を使って社会をコントロールしているかなどなど。これらのことが、従来のフィールド・ワークでできないということを示したらいいのではないか、と言っていました。

納得いきますか。今、私の頭は文化人類学から離れているので、正直言ってよくわかりませんでした。

今、大きな喜びをもって『マヌスの宗教』*Manus Religion*⁵²⁾読んでいます。彼らは賢い悪魔たち？そしてみごとな洞察力です。系図——あるいはいくつかの系図表が付いていたら、もっと読みやすくなるし、ひとつのことを逃した時に、全くわからなくなってしまうので済むと思います……

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1931年6月12日金曜日、ニューメキシコにて

……パパ・フランツとここまで楽しく来ました。先生は仕事をしないで、みんなとおしゃべりするのが好きです。先生は今日、インディアンといっしょにアルバカーキーにいます。電車で別れ際、自分はなぜもっと遊び時間をとらないのか、愚かだと言っていました。自分の好きな音楽と二人ばかりの人を連れてこの砂漠にやってきて、仕事だけに専念することができるだろうに。それなのになぜ自分は言語ジャーナルとコロンビア大学のシリーズを選ぶのか。どうせあと何年かすれば、どちらもあきらめなければならないのに、最後までしがみつ়理由はあるのだろうか、と言っていました。でもそう言っているだけ……

[アパッチの調査旅行中のルース・ベネディクトから

ニューヨークのマーガレット・ミードへ]

1931年7月23日、エルパソにて

ブラウン⁵³⁾と文化人類学の話をする機会をもったあなたがうらやましいです。私が話せる人といえば、ソルとモリスだけで、二人ともがさつな若い科学者たちです。今の時代とは違った時代に大学にいてよかったと思います。若い人たちの惜しみない情熱はほほえましいですが、彼らの計画や考え方は、肉体的、いや、精神的に疲れます。

〔アパッチ調査中のルース・ベネディクトから
ニューヨークのマーガレット・ミードへ〕

1931年8月8日、エルパソにて

*Reservation women*⁵⁴を読み終わりました。次から次にいいお仕事をなさっていると思います。月曜日に送り返しますが、その前にリントンの学生であるソル・タックスに読ませました。彼がここで扱っている問題はまさにこの本で扱われているものです。オマハ族にとって失われた二世帯を振り返って、二世帯後の人たちが今のこの居留地の研究がなされれば興味深いことでしょう。もっと計画的に事が運ばれば、ここオマハの悲劇は避けられたでしょうか。それは可能だったのではないかと確信します。ソルには可能性があるとは言えません。ひょっとしたらないのでは。会ってあなたと話できればいいのですが。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1932年1月20日、ニューヨークにて

まず病院の報告をしなければなりません。パパ・フランツは自分があまり活動的でないことを気にするくらい元気です。以前はそうしたことを気にする余裕もありませんでした。今は聞き取りが終わらせられないと気にするし、自分で起きたり、動いたりできないことを気に病んでいます。でも今は休む必要があるんだと思います。何時間もの間仕事をする日もあれば、ペンを数分動かしたら力尽きてしまうこともあります。病院によると、順調に回復しているそうです。もう話しましたよね。彼の本当の病気は心臓の血管（心臓の筋肉へ血液を送る血管）が詰まっているそうです。血液凝固の原因となる一ヶ所はまだ残っているので、また血管が詰まるかもしれませんが、それを防ぐ手だてはありません。元気になって多少仕事をやり過ぎたとしてもあまり状況に変わりはないようです。でもまたいつ発作が起きるかわからないというのはつらいです。……

*Reservation women*⁵⁵の原稿はずいぶん時間がかかっていますね。今は誰もお金をもっていないので、すべてを停止状態にしておき、もっと本が売れるような時機に売り出すことを望んでいるようです。アニミズムの論文をJRAI（ジャーナル・オブ・ローヤル・アンソロポロジカル・インスティテュート）に掲載することを検討してもらうようにセリグマン社に送りました。いい論文だと思います。AA（アメリカン・アンソロポロジスト）は我慢できない位遅いです。私のコンフィギュレーションの論文⁵⁷はやっと出て、あなたの論文⁵⁸は出ていません……

*The Waves*は気に入りましたか。そして読みながら、あなたも同じようにみんなをそれぞれの位置に置くことを考えましたか。私は考えました。激しい気性の人が含まれていなかったことに少しがっかりしました。私が人を集めるとしたら、もっと多様なものにします。私だったら、私と同じように無関心な人を含めるだけでなく、あなたやスタンレーのような人も入れます。……ウルフス夫人のようなタイプは、遠まわしにものごとを考える人で、穏やかでないこ

とは絶対にしないということに気づきました。このように人をグループ分けするということはとても面白いと思います。作家はもっとこうしたことを扱った方がいいと思います。そうすればもっと色々なタイプの人が含まれるでしょう。でも一般の人が *The Waves* の話をするときには、それがどういう意味かの話ばかりなので、まったく退屈です。この本のテーマは何なのでしょう。様々な奇妙な提案が出ています。私にとってそれは、人生は包み紙のようなもので、自分を殻で包むということです。自分でどんな殻を作れるかによって結果が決まります。この作家は限定したタイプの人を見事に扱っていると思いませんか。

パパ・フランツに蓄音機を買おうと思っています。パパ・フランツは蓄音機を借りたいと言ったのですが、みんなのお金を集めてプレゼントしたいと思っています。お気に召せばいいのですが。パパ・フランツがものを頼むことはめったにありませんので、彼の望みのために何かをして差し上げるのは楽しいです。

〔ルース・ベネディクトから
ニューギニアにいるマーガレット・ミードへ〕

1932年7月20日

明日、母と一緒に車ででかけ、ニューヨークを1ヶ月ほど留守にします。ここで過ごした3週間、まあまあよかったです。素晴らしい夏の陽気です。予定通り図書館での資料調べは終わらせたし、私にとってはかなりの量の文章も書くことができました。あなたの仕事の速さを気にしないようにしなければなりません。どんなに頑張っても、あなたのように仕事はできません。でも、あなたがここにおいて、訂正をしてくれたり、提案をしてくれたりすれば、どんなにいいでしょう。あなたとレオがいない文化人類学がどんなものか想像がつかますか。ほかの人は自分の分野についてしか語らず、それをほめてもらうことにしか興味がありません。そうでない場合、話を聞く価値もないような連中です。だから自分の本⁵⁹⁾のことは何も言わず、関わらないようにしています。今は「論文」を書いているとっておいて、もし本が出来上がったら、それらの論文をまとめて本にしたと言えればいいです。どんなに苦勞してこの本を書いているかは、彼らは知る必要もなく、わざと彼らの意見を聞かなかったことも彼らには知る必要はないです。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1932年7月29日、

ニューヨークのノーウィッチにあるシャタック・ファームにて

……私にしては本当に誉められるくらい本が進んでいます。でもあなたならどんなにか早く本を終わらせられるか想像できます。内容のほとんどは理解しやすく、授業などで何度も繰り返し述べてきたことです。しかし私は仕事が遅くて、でもそれはどうしようもありません。

母は私と一緒にいてくれており、とても過ごしやすいです。昨日とその前の日は、キャッツキルズからドライブして、途中、母の大学時代の友人を訪問したりしました。母と一緒にこうした時間が持ててとてもよかったです。夏の間、車があって本当によかったです。……

〔ルース・ベネディクトからレオ・フォーチュンへ〕

1932年8月2日、

ニューヨーク、ノーウッチのシャタック・ファームにて

『ニュー・リパブリック』に掲載されたこの小さな書評は、すてきだと思いませんか。評者はポイントをつかんで、読者のために一つのパラグラフにうまくまとめていると思いませんか。

『ニューヨーク・タイムズ』の記事は見なかったんですか。ニューヨークに帰ったら、ダットン（Dutton）社に行き、その書評を見つけてあなたに送ります。

話す人みんながそれぞれの能力に応じて、あなたの本⁶⁰が気に入っています。つまりそれを評価する能力を一番もっている私が、あなたの本を一番好きになれるということです。小さな大学の図書館の人が来て、学生のための文化に関する本はどれがいいか聞かれると、私はさすがドブの本がいいと言い、その他の本は自由に選んでくださいと言います。新しい論文を常に出している哲学科の若いシュナイダーとフリース先生は、大学の授業のための比較宗教学の本を出そうとしているのですが、原始宗教の例を三つばかり欲しがっていました。ドブを入れなさいと言ったんですが、ドブの本は簡単に手に入るので、参考文献に入れればいいとなり、本のなかには入れないことにしました。それでドブ以外の宗教をデイヴィッドに一週間も探させたんですが、ドブのことをもう少し調べてみると、やはりドブを入れたいと思ったようです。彼らがテキストに入れたあなたの本の要約を読んで、きっと読者はあなたの本にもっと注目するようになると思います。

それはさておき、私がこの夏書いている「本」についてお話ししなければなりません。すでに4万語書き終えたと言ったら、驚かれることと思います。……いとも簡単に書くことができたんですが、不満なことはただ一つ。あなたやマーガレットにそれについてコメントしてもらえないことです。デイヴィッドにカーボン・コピーを作ってもらえたら、すぐにそれをあなたたちに送り、出版前にあなたたちからコメントをもらいたいと思います。

本のテーマはまた文化の形態についてです。最初の章は、古い文化人類学と新しい文化人類学についてで、ここには「原始的」という概念を捨てるべきだという以前から言っているようなことが書いてあります。以前に『センチュリー』誌⁶¹に寄稿した論文に書いた文化人類学の目的といったことを書きました。その次に「文化の多様性」の章があり、生活の様々な側面によって他とは異なるようになり、その特徴が浸透することによって、ますます他と区別されるといった点を書きました。その次の章は「文化の統合」で、この章ではなぜ諸文化は形態を成していると考えべきかの理由をあげ、それを試みたドイツ人について書きました。それから

プエブロに関する長い論説があり、北米の他の地域とプエブロ族を比較しました。プエブロ以外の北米に関する記述は次の章で、とても長いものです。そこでは「形態」⁶²⁾と「アブノーマル」⁶³⁾の論文で書いたことを更に詳細に述べています。三つ目の例としてドブの例をあげたいと思います。あなたが私の言いたいことをすでにうまくして書いているのでドブを取り上げない方がいいかもしれませんが、ドブの資料は、南西と北西海岸の資料のように生のデータを練り直したものではありません。でもドブの資料はとても貴重ですし、私は本でしか知らない資料、そしてその文化に精通した人と話す機会を持たずにその文化について書くということはしたくありません。そのため、ドブについての章を書くことにしました。あなたの「人をあつと言わせるような資料」に読者を注目させ、人々をそちらの方に導くような解説にすることができると思います。そして文化を比較するということが、どういったことなのか読者に明確な言葉で説明しなければならぬと思います。これに対してあなたがどのような反応をなさるのかわることができればいいのですが。あなたは本を通してあまりにも素晴らしく説明されたので、それを拝借するしかありません。一方、私はあなたのドブの資料を最後の章の土台として、誰よりもうまく使えると思います。最後の章は、ひょっとすると二つに分けるかもしれません。一つは「文化とアブノーマル」の論文をもう少しふくらませたもので、個人が自分の文化のタイプに合わせて自分を調整するという話です。

このようにして、あなたの言葉を使わせていただくことに対して、お嫌でしたら、着払いで結構ですので「ヤメロ」と電報をうってください。それですぐにわかります。でも章を書いてからでなければそれができないので、いずれにしても原稿のカーボン・コピーをお送りします。「統合」の章では、どうしてこの三つの文化を選んだのか説明し、どの文化においてもフィールド・ワークを行なった人と直接話をし、コメントをもらったことを述べました。ですからドブの章が出来次第お送りしますので、なるべく速くコメントが頂きたいと思います。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1932年8月10日

先週、頭のなかで例としてどの資料を使おうかと考えている時、レオに手紙を書きました。本の構想を送ったので、ちょっと読んでみてください。もし先を考えることができていたなら、6ヶ月前にこれに気がつき、彼の返事を今の段階で受け取ることができていたでしょう。あなた方は自分の扱っている文化を十分に記述しているため、私がいまさら取り上げてもあなた達の繰り返しになってしまうと思いました。だから自分の本であなた達の書いた文化を取り上げるとは思ってもいませんでした。あなた達はあまりにもうまく記述しているものだから、私にはそれを真似ることしかできません。でも、プエブロとNWC⁶⁴⁾の研究は事情が違い、十分記述されてはいません。私が本で扱っているテーマを解説するのに他の人(他のフィールド・ワーカー)が記述したものを扱うのはリスクをとまいません。北アメリカの研究を扱う時でさえり

スクがあるのですから、他のところは推して知るべしだと思います。……

本のタイトルをあれこれ考えています。私の本分は他の分野ではなく文化人類学にあるのだからということを示してくれるようなタイトルを選びたいのです。つまり、心理っぽい題名にはしたくないのです。「未開の人々：文化タイプとは何か」をタイトルとして考えています。何か提案はありますか。もっと後に変えることもできます。

この本の計画を練り始めるまで、自分のこれまでの仕事と同じ枠組みに入ることに気づきませんでした。「文化とアブノーマル」⁶⁵は気に入りましたか。いくつか訂正を入れたかったのですが、これまでできませんでした。そのため長い間放置していました。シマルハウセン（Schmalhausen）から帰ってからどこへも送っていません。

8月17日

…… The Child in Culture⁶⁶「文化のなかの子供」はとてもいい本になると思います。手もとにある五つもの文化を参照できるなんて。

……それを何とかしなければいけないし、自分でそこへ行くべきなんです。今は学部にとどまらねばならない気がします。あなたは方法論に関する授業を絶対に持たなければなりません。あなたが言うように、今度こそ本当の方法論を教えなければなりません。パパ・フランツがインディアンの福祉業務に任命された人たちが受講しなければならない授業についてローズ（Rhoads）協会と連絡をとっていることは知っているでしょう。そこから何か結果がでるかもしれません。彼らは植民地的管理とはどういうことか全くわかっておらず、お互いに顔を合わせるだけです。でもそれは一つの学問分野になり得るし、一つの方法論の授業と呼べると思います。それをあなた以上にうまく教えられる人はいないと思います。

学部がどうなるかは全くわからない状態です。パパ・フランツはこれまで以上に元気に歩いていて、一日二マイル歩くそうです。毎日のノルマを決めて、少しずつ負担を増やし、順調に回復しているようです。でも先のことはわかりません。コロンビア大学の金銭的な状況を見ると、パパ・フランツがいる間は別の人を雇うことはできないと思います。しかも権限をもった新しい教授を任命する前に、パパ・フランツにきちんと定年まで働いてもらうのが正しい手順と大学は認識したと思います。従って今考えられることは、自分の地位を確固たるものにするのだと思います。そして後のことはパパ・フランツが辞める時に考えることにしましょう。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1932年9月8日

文化人類学に対する強い思いを書いてくださってうれしいです。——前からその思いはあったのですが、その違いは私も理解できます。私も同じ道をたどりました。帰ってきたら、私の真剣さを見て驚くと思います。……

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1932年9月18日

……本の最初の三つの章と、ズニの章を日曜日にクノップ出版社に持っていきました。それを見て、本を出版できるかできないか判断できると思ったのです。ゴールデンワイザーの問題作に振り回されてしまい、その本のツケを全部引き受けなければならない覚悟でいます。だから文化人類学の本を出して、またリスクを負う気にはならないようです。とにかく、不景気が収まるのを待たずに、本を出版するチャンスがあるかどうか知りたいのです。

また景気がよくなるという楽観的な考えをもつ人がいるんですよ。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1932年10月9日

……本の最初の四章は書き終わっているのですが、もう二章送れると思って次の船まで手もとに置いています。授業が始まり監査などもあり大変なのですが、私がそうした状況でいかに仕事をこなしているか知ったら驚くと思います。いや、驚いてほしいです。驚かないとしても、以前より仕事はこなせるようになりました。仕事の背後にある普段の生活にどれだけエネルギーを費やしてきたかわかります。もう詩は書きませんが、今の気分だともう詩は書かなくてもいいです。あなたが帰ってきて、明るく、機嫌がいい女主人になった私をどう思うでしょう。今から心配しても仕様がなです。あなたが帰るまでには、また変わっているかもしれないことだし。私の好みは、きちんと完成された仕事（ラ・フレッシュ<訳者注、文化人類学者になった最初のネイティブ・アメリカン Francis La Flesche >が先週亡くなりました。）よりもいい加減なエスノロジーだというあなたのコメントは、クワキユートルの研究をしている最中のちょうどいいタイミングで私を笑わしてくれました。なぜならもちろんクワキユートルの研究を楽しんでいるからです。信頼できる生データが山ほどあるし、説明や解釈は最低限に抑えています。もちろんドブやマヌスの社会構造⁶⁷の研究よりこちらの方が好きだというわけではありませんが、あちこちの晩餐会に行っておばあさん方に自分をさらけ出す必要がないフィールド・ワークなので、気に入っています。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1932年10月16日

統合形態の議論に使う資料に関してあなたが私と同じ結論に達したことを喜ばしく思います。AA⁶⁸の論文のなかでナバホのディオニソスの特徴を証明しようとしたのではなく、ナバホ・インディアンの埋葬の習慣として報告された内容が、他の特徴の一般的分布とどのようにつながっているのかを示そうとしただけなのです。でも、ご存知の通りナバホの資料と平原インディアンの資料を使って彼らの文化がどのように機能しているかを記述することはできません。

今ちょっと自分の本に飽きがきています。なぜなら、あまりにも初歩的だからです。南西⁶⁹と北西⁷⁰のインディアンについてきちんと説明しているし、それらの記述はうまくかみ合っているとします。その後もう少し高尚な議論に入り、文化から逸脱したものを紹介するセクションになります。最初の四つの章のカーボン・コピーを船便で届けます。

世界の文化を統合形態に分けるにあたって、心理学者からしっかりした分類を与えてもらわなければどんなに困るかということをお前は書いてきました。もちろん心理学者の分類があれば整理できるかもしれませんが、果たしてそれが正しい文化人類学的研究となるかどうかは疑問です。小説家が登場人物の性格形成についてフロイトにまず聞けば、それなりの正しい答えが得られるかもしれませんが。しかし、そうすることによって小説家は自分が描く登場人物から目を離すことになり、実際にはフロイトは登場人物の性格を書く助けになったというより、かえって妨げとなったと言えます。これと同じ状況だと思います。そう思うのは、私が文化の特徴とその文化のなかの個人の制度化された特徴の関心に興味があるからです。他にも取り上げるべき課題があるのはわかっていますが、今それらを扱うような立場にないように思います。でも次にあなたが帰ってきた時にあなたが持って帰る資料を考えると、何もこれだけに課題を絞る必要はなく、どんな課題にも挑戦できるに違いないわ！

私はサピアの論文⁷¹をお前は少し違った解釈をしました。むずかしいのは私が使っていた概念について彼が何と言ったのかを理解することです。私の理解では、彼は中心から離れようとする文化、つまり（統合されていない要素を多くもっている文化）は擬似の文化であり、中心に近づこうとする文化、つまり（よく統合された文化）が真の文化だと言いたいのだと思います。それからサピアは真の文化は整っており、充実している等々を述べ、擬似文化はごちゃまぜで、充実していないと書いています。それに対して私は、均質の文化でも下品な考えに基づいて確立されることもありうることで、ある社会が見栄っ張りや偽善的なものに溺れるのは、その文化がそのようなものを表現するのによく統合されているからかもしれないと言いました。あなたがおっしゃる通り、彼の言う「中心から離れようとする社会」の定義をもっとはっきり定義させれば私の言いたかったことがよく伝わったかも知れません。でも自分の考えにあまり確信が持てなかったのです。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1932年11月30日

エスノロジカル・ソサエティ⁷²でサピアが発表していました。その内容はかなり出来が悪かったです。彼がどんなに愛嬌をふりまいても、彼の資料の乏しさを露呈していました。彼の発表は近代文化人類学における機能とパターンに関するもので、ラドクリフ・ブラウンを焦点としていました。ラドクリフ・ブラウンに対してあなたが思っていることがナンセンスでなかったとしたら、サピアが言っていることはフェアではありませんでした。フェアでなければなら

ないと言っているわけではないのですが。興味深いことは、エドワードが文化の役割を認めなければいけない立場から自分を解放する新しい方法を見つけたということです。エドワードはフットボールに対する自分の反応を分析し、以下の教訓を導きだしました。文化のどの側面もその文化の人にとってはすべてであり、それがどのような機能を果たすかなど消え失せてしまう。つまり、ラドクリフ・ブラウンが主張していることは排除されるということです。何ということでしょう！それを聞いて私が思ったのは、エドワードがまたしても荒唐無稽の議論をうまく言葉で説明したということです。つまり、自己満足です。そして次の文化人類学の大きな決闘は、サピアとラドクリフ・ブラウンとで戦わされるでしょう。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1932年12月28日、アトランタ市にて

文化人類学の会合は、ここを何とつまらない場所に変えてしまうのでしょうか！あなたはもう忘れていたかもしれませんが、——私も忘れかけていました。でも本当にそうです。ローウィーもサピアもそしてクローバーも来ていません。パパ・フランツだけが唯一の知識の源です。ラドクリフ・ブラウンに対して連帯感を持つとも思っても無理です。彼は偉ぶっており、ズケズケともを言うタイプの人です。会って三分もしないうちに、ブラウンは自分の二人の学生がネイティブ・アメリカンの社会構造についての「初めての」研究論文を書いたのだと言っていました。ソル・タックスはフォックスの研究をし、エガンはホピ族の研究をしているとのこと。……〔ソル〕は分散したフォックス族と六週間過ごし、近親関係の用語さえもマスターできていません。……（もちろん言語はまったく手がつけられていません。）エガンは今年のラボのグループに入っていました。（ラドクリフ・ブラウンによると「エガンはラボのばかばかしい連中を無視して自分独自の道を進んだ」そうです。）エガンの方がソルより有利なのは、彼が扱っているホピ族の方がフォックス族より分散していない点だと私は言いました。（フォックス族において異族結婚は完全に失われています。）するとブラウンは「彼らにはもともと異族結婚制度などありませんでした。機能する制度をもっているのです。分散している文化について言うなら、ドブ族⁷⁴がまさにそうです。ドブ族の間では機能する制度が失われてしまっています。でもフォックス族はそうではありません」と言いました。私はネイティブ・アメリカンのエスノロジーの面白さは、宣教師などによってキリスト教化され、アメリカ化された人がその文化においてどの程度機能的調整をしているかをみることだと、やんわり言いました。そしてそこまでとどめました。

もし彼が高いスタンダードを持ち、その文化の言語も学んでその文化全体と親密に関わり、親族関係にも基本的理解をもっていたとしたら、これまでアメリカで行われた研究に対する彼のあざけりはわかるのですが。そして分散した文化の研究に対して軽蔑したとしてもかまいません。でも彼が言っていたような研究を、世界を救うものとして私の目の前に押しつけるのは、

悲しいことだと思います。オプラーのアパッチの社会構造⁷⁵⁾の研究は満足できる研究だとは思いませんか、と聞いたところ、彼はこう言いました。「最初はわけがわからなかったんですが、私が手を加えることで非常によくなった」と。オプラーのあの論文原稿が完成するまでの紆余曲折を私はすべて知っています。そしてオプラーがあのお原稿で直した唯一の点は、シカゴ大学が彼の論文をパスさせてから私が指摘した箇所を彼がシカゴからの帰りに訂正した部分で、私が正しかったことを証明した箇所です。オプラーがそこを直したことは何の問題もありません。私はネイティブ・アメリカンの資料をよく知っていますが、ブラウンは違います。別に彼が嫌いではないけれど、私にあんな態度をとるのは愚かだと思います。

ブラウンの言っていることは私にはわかりませんが、あなたなら理解できるかもしれません。私に言わせれば、彼は自分に対して過剰評価に陥っています。彼がコロンビア大学でポジションを得るための手助けをするつもりは私にはありません。私の結論は早急過ぎるかもしれませんが、……私は証明してもらわないとだめなんです。今のままだとブラウンは正しい研究を間違った研究から守っているのではなく、自分の弟子の研究をそうではない人たちの研究から守っているように思えます。そしてそれは致命的です。

ラドクリフ・ブラウンのプレゼンテーションは明日に予定されています。プログラムを同封します。前の手紙でもこれについて話しましたよね。そしてこの「シンポジウム」における私の役割も。ここでのコールの活動から推察すると、「男同士の大きな集まり」になるようです。……

ブラウンに対する私の苛立ちについて、あなたとレオはどのように感じているのか知りたいです。他のアメリカの文化人類学者を敵に回して、彼の見方をする気はもうとうありませんし、そんなことをすれば、人間関係が破綻してしまうと思います。あなたとレオが上の人たちからの命令の通り働く必要がなく、私たちは自分たちが必要だと考える仕事できて本当によかったと思います。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1932年12月29日 アトランティック市にて

リチャード・トールマンの物理の授業に出っていますが、スライドを使っているものなので、そっと抜け出そうと思います。……「学会」はだんだん戦いの場になり下がっていく感じでした。コールは彼の奇妙なフィリピン研究を成し遂げるために使った調査方法について話し、ラドクリフ・ブラウンは文化的特徴の相互関係について話しました。少なくとも私はスピーチの途中で中断されることがなく、パパ・フランツが後に短い演説をし、バック氏は力を持っている私たちが予算を獲得すれば、フィールド・ワークをしている人は、規定に従って仕事をするのできるのではないかと素晴らしい抗弁をしてくれました。——でも一つの仕事を成し遂げるのに、現在の予算でどうしろというのでしょうか。

みんなが強調していた点は、研究は投資された時間数によって評価はできないということでした。コールはフィールド・ワークでの最初の三ヶ月間のノートは破ってしまうべきだと警告しました。RB (訳者注：ラドクリフ・ブラウン) は短期間しか滞在しないで本を書くような人たちに厳しい判定を下しました。バックも原地に長年にわたって滞在しなければならないと言いました。BM (訳者注：プロニスワフ・マリノフスキー) がトロブリアンド諸島で行なったように現地にどっぷりつかって居心地よくなるまで滞在した方がいいそうです。それはいい点と見なされるのだそうです。無理をするなどということです。RBは研究するには最低二年間は必須だと言いました。どう思いますか。私はこれを聞いている間カッカしていました。

RBはとても貧弱な内容で議論を締めくくったと思います。彼は立ち上がって、分布によって変化が再構築できるという私の主張に反対しました。そしてハワイとニュージーランドでのtとkの入れ替わりについて詳しく話しました。しかし、彼いわく、それだけではどのようにして変化が起きたのかわからないということです。そしてそれがわかるためのチャンスは、今サモアで同じ変化が起きているので、答えが得られるかもしれない等々と、言っていました。みんなの前では聞かなかったのですが、後から彼にこの変化がどのようにして起きたのかというデータを示すためにどのような観察をするのか聞きました。なぜなら彼が強調したのはこの点だったからです。すると彼はこう答えました。「あ、私は言語学者ではありません。言語学者にテストさせればいいじゃありませんか。」それに対して私は、「でも最後には変化が起きたという事実のほかに、何か得られるとお思いですか」と聞きました。RBは「でもそれを観察するわけですから」と言い放ちました。彼が言ったことをそのまま書いているのですが、ここにあなたがいて彼が言っている意味を説明してくれればいいのにと私は思います。私の個人的な意見では、彼はセンセーションナリスト⁷⁶⁾で、直接接触することなしには物事の妥当性を認めることができないのだと思います。でももっと鼻につくのは、彼が自分の弟子とそうでない人を区別することです。

パパはこれらの学会をうまく乗り切りました。——コロンビア大学の講義だけでも疲れてしまうのに、今回はそうしたことはありませんでした。退職する会長のスピーチとして「文化人類学の研究の目的」⁷⁷⁾の話をしました。それは内容が詰まっており、普通の人だったら資料なしには発表できないようなものでした。コピーを送ります。それは彼の存在した証となるものです。でも誰もそれを大きくは取り上げないでしょう。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1933年1月6日

私の統合形態の本⁷⁸⁾でドブ族の資料を使いたいと私が書いたことに対するレオの反応をあなたの手紙で知り、とても心を痛めています。もちろん彼からの手紙はまだ受け取ってはいませんが、彼に少しでもためらいがあるとすれば、彼の資料を使うつもりはありません。ある文化

の慣習、たとえば平原インディアンの慣習に基づいてのみ言える点は論じるべきではないという結論に私も違う切口から達したことをあなたたちは喜んでいました。そういう個別の事例に関して言える点は他の事例にも言えるとは限らないと思います。しかし、慣習を理解して、その慣習を人々がどのように使うのかを理解することが「一般化し過ぎているという危険性」をもっているとは思えません。

あなたがおっしゃる通り、同じ慣習が文化によって全く反対の目的で使われることがあると私も思います。以前からそう思っていました。「あなたが言う一般化し過ぎる危険性」についてもう少し書いてほしかったです。でも、私の本の章をお受け取りになった段階で、それに対する評価を書いて下さることでしょう。それを待つことにします。今のところコメントを送ってくれたのはNさんとオットーさんとパパ・フランツからだけで、Nさんは関係代名詞と先行詞と接続詞についてご指摘くださり、とても役立ちました。そしてオットーさんのコメントは、私が書いた文に関してで、それを引用する権限が私にはないと書いてきました。彼は、その人が一生のうちで一度も言ったことがないようなことをだれかが引用することを何よりも恐れています。そしてパパ・フランツのコメントは「ムール貝」ではなく「ハマグリ」に変えなさいというものでした。パパ・フランツは他のことも言って下さったのですが、ほとんどコメントはありませんでした。レッサーは原稿を読んではいないのですが、あたかも私が何でも知っているかのごとくに、「それがどうして渦巻状のバスケット（カゴ）の説明になるのですか。」といて怒鳴ります。今まで注目されたことがなかった些細な点を指摘すると、あたかもそのことがすべての知性を表していると主張しているかのように受け取られるのはうんざりです。

今、本に対してあきあきしています。休みの間は全く手をつけなかったし、今も何もしていません。時間がないのは確かですが、気分が乗らないのです。そのうち気分も乗ってくるかもしれないませんが、二ヶ月位、本には取り掛からないと思います。

〔レオ・フランクリン・フォーチュンから

ルース・ベネディクトへ〕

1932年11月21日、（訳者注：ニューギニアの委任統治領の）

セピック川、マリンバーグにて

ドブ族の資料⁷⁹⁾でいいのでしたら、もちろんお使いください。あなたがそのように思ったださっているのがとてもうれしいし、もう一度読んでも気に入っており、気持が変わらないことを喜んでいきます。

私が知らないシュナイダーやフリースのように私の資料を軽く考える人がいたとしても、取り上げていただければそれだけで十分です。もちろん軽く取り上げられるよりも、あなたならうまく使っていただけると確信しています。

次に活動し始めるときに、まず近親相姦について書こうと思っています。『百科事典』⁸⁰⁾では

私の部分が多すぎたにすぎたので、私が書いた文に彼らの手が加えられた記事で私の考えが伝わったかどうか分かりません。私が言いたかったことは、もし人々が何も言わないでいれば、みんなに嫌われ、逆にそれをでしゃばって言えば、同じようにみんなから罰せられるということです。今いるセピック地域⁸¹⁾で私が知りうる限りの近親相姦の記述よりもさらにその習慣が広く行なわれている場所を見つけました。ほとんど「ご自由に」という感じで、みんなは自由にそうしています。……兄弟間で、そして息子と父親の間で取り合いとなります。盾は槍を避けるのに非常に効果的で、人が殺されることはめったにありません。だから肉体的に被害を与えるための秘密の魔法のコンテストのようなものです。でも家庭内での苦々しい感情は残ります。ドブ族の場合よりもっと病的です。男性よりも女性の方が殺されてしまうことが多いです。なぜなら、彼女たちは自分たちの盾を持つことはなく、結婚したら夫に頼るしかないからです。だから、お兄さんが妹を殺したり、あるいは駆け落ちをして男を確保しなかった娘を、父親が殺すということもあります。変な社会でしょう？ まだ調査されていない社会においては、人間の怒りの現れの限界にまだまだ達していないことがはっきりわかります。

いつかそちらに戻るのを楽しみにしています。しかし、ここでの仕事はまだたくさん残っています。

〔ルース・ベネディクトからレオ・フォーチュンへ〕

1933年2月10日

お手紙を受け取りました。ドブ族の資料をご親切にも提供いただけるとお聞きし、ありがたく存じます。手紙をお書きしたときには、ドブ族の部分は先に延ばし、あなたがお帰りになった時にご指導していただければと考えていました。しかし、様々な国際的な問題により、もう丸一年現地におられるということを知り、そうもいけなくなりました。本を執筆中、黄金律が破棄されたこと⁸²⁾で、もう一年調査を続けなければならなくなってしまいました。私もなるべく早急に本を書いてあなたに送り、全部済ませて印刷に出す前にあなたからの評価がいただけるようにしたいと思っています。

実は昨年の秋にクワキュートル族の部分を書き終わってから、本の執筆を行っていません。あなたとマーガレットからの評価を楽しみに待ち、その後すべてを見直し、最初から始めます。最後の章には心理的な影響と社会的な影響について書き入れようと思っているのですが、これに関する文献はがっかりするくらい乏しいです。量的には乏しくないのですが、もっと悪いことに……

あなたが書いてきたセピックのスキャンダラスな文化⁸³⁾について色々想像を巡らしています。スキャンダラスの方が好きだということをあなたはご存知だと思います。スキャンダラスの可能性はあなたがおっしゃるように無限だとは思いませんか。私は好奇心でいっぱいです。

でも拝読する限り、あなたが居た場所はあまりいい感じではなかったようなので、その場所を離れたとお聞きし、ほっとしています。今度の新しい場所⁸⁴⁾は、以前と同じような物理的特徴がないといいのですが。そしてあなたたちが快適に暮らしていらっしやればと願っています。あなたたちを恋しく思います。文化人類学について話す相手がいない私のことを思ってください。そして黄金律に対してイギリスがとった行動に怒りを覚えます。できるだけ元気で快適に暮らしてください。お元気で。そしてドブ族の資料を使用させていただけること感謝します。

【ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ】

1933年3月10日

ここのクレイジーな文明のニュースは、あなたの地域にまでどの程度伝わっているのかしら。銀行の騒ぎや国中のすべての金融取引が止まったその次の日に、今まで思わしくなかった政党が勝利するなんて。国全体がかなりぐらついているように思えます。……銀行の休日が終わり、投資家のお金が失われてしまったら、その反動はあると思いますが、今は楽観的な状態です。……

今週は素敵なプレゼントも頂きました。もうプレゼントなんてもらえないと思っていたのですが、また頂けるなんて。プレゼントというのは延長給料としてもらった1000ドルです。大学が経済的に困難な状況だった時、パパ・フランツは給料を受け取りませんでした。その時私が思ったのは、もし本当に経済的に困窮しているなら、私に延長給料なんてくれるはずがないと。それで実際にそれを大学側が申し出るのを待っていようと思っていました。やがて学部長がパパ・フランツに連絡をし、私の契約を継続すると言い、パパ・フランツも了承しました。それで以前のように1000ドルが貰えるようになったのです。

先週、新聞で『紳士録』に加わった新しいスターの名前が発表されました。リストはばかばかしいものですが、女性は三人のみで、二人の動物学者と私です。私たちは三匹の踊る熊のように見えたと思います。文化人類学者で載った人たちのリストをお送りします。……もちろん年齢の上の人たちが中心ですが、去年の冬に候補者を挙げるように言われた時、あなたの名とバナーの名をリストに加えました。パパ・フランツはグラディスの名を入れました。……『トリビューン』紙の記者はバカです。女性文化人類学者について聞かれたのですが、それは一般的な女性科学者の記事にされてしまいました。家事が好きかどうか、趣味が何か聞かれ、私は客観的になることばかり考えている女に仕立て上げられました。『デイリー・ミラー』紙は「キャビア」というコラムにこの記事を載せ、後には「グランド・ストリートのデリカテッセン」という記事をもってきました。

日曜版の『タイムズ』⁸⁵⁾にあなたの記事が載るのを待っています。うまく編集してくれたと思います。エージェントが彼らに任せただけです。でも男が女を下に置かなければならない理由がはっきりしないという点が気に入り、電話したそうです。心配しなくてもいいと言っておき

ました。これであなたのために150ドルの保証金をとっておくことになります。

今週『マン』の編集長から手紙を受け取りました⁸⁶⁾。去年の9月に彼らに手紙を書いてから初めての連絡です。彼らに言わせると、ハートからの返事を待っていたそうです。その手紙を同封します。彼ら書いた要約と後悔の気持で十分だと思います。手紙の日付が1月25日だと気づきました。そして今週届いたのです。

オマハの本⁸⁷⁾のタイトルを変えたというメモをローウィーに送りました。そして評論家が事実を述べることもありうることを告げました。それがベストなのではないかと思えます。なぜなら本からの抜粋や参照の場合、論評のなかにそれに関する情報が提供されるからです。もし脚注にしかその情報が現われなければ、それに興味をもっている人は、その情報を簡単に見つけることができないかもしれません。……

仕事はたくさんしたのですが、自分の仕事は何もできませんでした。多くの学生の現地調査の資料を読む必要があり、「方法論」とよばれている理論の授業にかなりの労力を費やしました。方法論に考慮して、内容をいくつかに分けました。ひとつは歴史的再構築、もうひとつは熱帯研究(ウェスター・マークの結婚、ビーグルホルの資産、ボアズの芸術など)、それから機能研究です。今は二番目のトピックを扱っています。説明を聞きに定期的に参加するアル・レサーが活気を与えてくれます。……こういったことで、これらの問題が実際に起きているということをクラスは認識し、私もさらに気をつけて話をするようにします。アル・レサーが来ずに、私の足元に集まる学生だけだったら、そんなことはないでしょう。学生は本当に子羊みたいです。

[ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ]

1933年4月25日

次の船が到着して、あなたからの手紙が届くのを待っていました。新しい調査地⁸⁸⁾に関する説明は何も受け取っておらず、そこがどんな状況なのかもわかりません。それだけで落ち着かなくなります。……しかもアンブンティ⁸⁹⁾からの郵便がどの位の間隔で来るのかもわかりません。たとえ船で着いたばかりのあなたの手紙を受け取ったとしても、私の返信の手紙の効果は、今と変わらないのだと自分に言いかかせています。早くても一つの手紙のやりとりには5ヶ月かかり、5ヶ月の間に起こる変化は、7ヶ月の間に起こる変化とあまり変わりません。

[チャンブリに滞在中のマーガレット・ミードから

ルース・ベネディクトへ]

1933年3月18日

頭のなかでブラウン宛のこんな手紙を何度も構想しています。「親愛なるブラウン、フォックス文化とオジブワ文化は機能していると聞いたので、機能していない壊れた文化に残ることに

しました。愛と接吻をこめて」等など⁹⁰。でも実際には、ムンドグモーについて長い手紙を書いたところですよ。……そしてたぶん放っておくでしょう。彼のフィールド・ワーク、そして具体的な資料の扱いはすばらしいし、彼はチャーミングで、学生に刺激を与えるような講義をするし、学生に対してもとても親切です。彼の基本的なアプローチでは、世界は救えないとずっと思っていました。ただ、フィールド・ワークをより知的に行なうためには、役に立つことだと思います。何と言っても、彼の哲学前提は、社会は人々が一緒に生きるためのものだということ、彼の他の考え方は、そこから論理的に導き出されたものです。マリノフスキーも同じように二つの前提を基本にしています。ひとつはブラウンの前提で、もうひとつは社会は個人に内在する要求を満足させなければならないというものですよ。マリノフスキーはそこから色々なことを論理的に導き出すのです。私は文化人類学で哲学的な考え方や演繹の考え方は取り入れるべきではないという確信にいたりつつあります。もちろんパパ・フランツは経験主義を標榜してきた学者ですが、その経験的考え方は、社会文化人類学のどのデータに基づいているのかをはっきりさせたことはありません。……ブラウンは状況を読むのが下手で、政治的センスもありません。……看護師が必要です。

……今、夕暮れと暗闇の間の時間にこの手紙を書いています。細かい字で書かれた言語ノートがこの時間に読むには暗すぎます。ランプはついていますが、フォックス文化の外婚制度ほどうまく機能していません。……私の職はこちらにいる方がそちら⁹¹にいるより安全なような気がします。人食い人種のなかで一人である私を首にすることは、子どもたちに残酷な仕打ちをするのと同じように受け取られるでしょうから。

3月21日

これら全てを明日送ろうと思っています。突然エネルギーが湧き出し、私からみたこの文化のカギがわかりました。昨日、喪の家で何時間も床に座っていた時に思いつきました⁹²。ここからは順風満帆で、ただ自分の直感の波及効果を整理すればいいだけです。私たちは二人（フォーチュンとミード）ともこの文化における大きなひらめき⁹³を頂いており、残りの時間はただ順調に仕事を進め、検証し、録音し、詳細に述べ、そしてこの継ぎ合わせが長い言語を学ばねばなりません。うんざりします。5音節も6音節もある名前を覚えるのは大変なことです。そして540人しかいない閉ざされた集落なので、細かい点まで完璧に調べねばならないのですが、大変な仕事です。

私たちは⁹⁴みんな *Year before Last* が気に入りました。この本をもっと好きになれなかった理由は、*Maurice Guest*⁹⁵の著者がそうであったように、著者は自分の小説のなかに入ることができず、「ハナ」でいたことです。そのため大きなマイナス点となっています。私はマーティンの肩をもったのですが、それはおそらくよくないことでしょう。……マリアン・ミラーがキャンディの入った大きな缶と *Father Malachy's Miracle* を送ってくれました。いつか病気になった時のためにとっておきます。

ある人がパパ・フランツの写真の入った記事を送ってくれ、それを蚊帳がある部屋に飾りました。それを見ると、とてもうれしくなります。時間ができ次第、パパ・フランツに手紙を書こうと思っています。今日はあまりいい日ではありませんでした。嵐よけのシートを張るのに一晩中忙しかったし、朝は暗くて雨が降っていました。そしてキリンビットの集落での出来事を偵察してくれる人が報告を怠り、チェイクンバンは一晩中フルートを吹いていたため、とても眠くて言語学の手伝いができませんでした。ひどいイチゴ腫に悩まされ、手当てをしなければなりません。足の指の半分が侵され、ひどい臭いです。そして小麦粉がみんな燃えてしまった(マダンから持って帰る途中の舟の火事によって)のです。そしてたくさんの蚊等など。ここ3日間とても順調だっただけに、悪い方向に転がるのは避けられなかったのだと思います。……

この文化はとても素晴らしいです。人々はよく働き、バランスがとれており、物事が機能しています。すてきな場所です。

[マーガレット・ミードからルース・ベネディクトへ]

1933年日付なし、セピックにて

あなたにここに来てもらえるなら何でもするわ。なぜならあなたがここにいたら、私はあなたの顔を見ながら話せて、間違ったことを言わずにすむからです。と言うのは、あなたの初稿⁹⁶⁾について言いたいことがたくさんあるのです。私はあなたからのたくさんの批判を受け入れる立場に当然あるのですが、あなたが私にくれた批判以上に *Patterns of Culture* に関して言いたいことがあります。でもそれは私たちの性格の違いからきているとご理解ください。しかも私の場合は一言一句あなたにチェックしてもらっていました。あなたがこの本を書くことは非常に大切なことだとずっと思っており、過去5年間、私はあなたにこの本を書いてもらいたいと思っていました。だからもし私の批判によってあなたが書く気持を失うようなことになるのは悲しいことです。でも同時に、あなたをオオカミから救えるのは私たちだけで、私たちが思うことすべてをあなたにお伝えできねばなりません。それでは評価を始めるので、あなたにわかってもらうために私が眉をひそめ、顔をゆがめながら話し、何か間違ったことを言ったらすぐに訂正しようとする私を想像しながら読んでください。

ズニの章は素晴らしいです。いくつかコメントをつけましたが、ありきたりのことで、南西インディアンのことを知らない人にわかりやすくするために入れた訂正です。この章と北西海岸の章が一番重要な章になることは明らかです。でも他の章の順序と構成が気になります。内容がそのへんの知的な読者から社会科学の初級者、哲学者、そして人種差別によって判断が曇るような人たちなどなど、4~5種類の読者を対象として書かれています。そしてまた、さんざん話を聞いている私にさえ、ナゾの部分もあります。あなたの文体に悪影響を及ぼし、内容が非常にまだらで、と切れとぎれになっています。時には親密な書き方をし、時には形式ばっ

ており、時には口語体、またはジャーナリズム的な書き方、時には文化人類学の専門用語が入り、時には文学的な表現が用いられています。これはおそらく、あなたが古い資料を使い、異なった時代に違う読者を想定して書いたためだと思います。たとえば『センチュリー』誌の記事⁹⁷⁾、『アンソロポロジー』の記事⁹⁸⁾、ブローケン・ベッセルのスケッチ⁹⁹⁾などの記事をつなぎ合わせており、全体が最初から書き直されていません。どの読者を対象にしているのかを決め、想定し、その人の視点から全体を通して読み、その読者が持っている単語の知識、一般知識、専門知識を考慮すべきだと思います。そうすることで、私が言っていることがわかるでしょうし、どこを変えればいいのか理解できると思います。バラバラの資料を寄せ集めることによって、またパパ・フランツやローウィーに認められたいために内容を変えることで、あなたの文体と均一性が壊されてしまったら残念です。彼らの言葉、そしてマリノフスキーの言葉もあなたの文体には合っておらず、しかもあなたの考え方も合っていません。レオと私は、誰を選ぶか考えていたのですが、デイヴィッドに読んでもらった方がいいと思います。彼女に全部を読んでもらい、必要のない部分はどの部分か、またどの部分が言い尽くされた箇所なのかを指摘してもらい、彼女が完全に理解できないポイント一つひとつを指摘してもらった方がいいのではないかと考えます。こうすることによって、不適当な部分をほとんどなくすることができるように思います。もちろん、この時点であなたが社会理論について書こうとしているのか、文化的性格に関する哲学について書きたいのか、それともこのような題材を扱っているようにみせながら、他の多くのことを指摘したいのかわかりません。残念ながら、この最後のことをあなたが試みているような気がしており、それは好ましいことではないように思います。あなたがしていることは、あまりに繊細なことなので、進化論や人種差別やその他諸々のことの中に埋め込むようなことではありません。私だったら最初の章を削除し、あなたが言いたいことと文化の伝播の関係についての理論的な議論は、三つの文化の後にもってきます。そして「人間の体験が描く経路と言語音」というような短い序論を付け加え、言いたいことを説明するのにあいまい過ぎる例は削除した方がいいと思います。なぜならそのことを示すためには、文化全体の説明を必要とするからです。

そして思春期も戦いについての箇所も省きます。なぜならレオが言うように、これはローウィーがいう「彼らはこういうことをする、あるいはしない」というだけであり、あなたが言いたいのは、彼らがあることをするか、しないかではなく、あることをしないことが驚くべきことだということです。そしてそれを説明するには、一つの文化全体の説明を要します。

つまり、まず簡単な序論、そこでは歴史や他のこと、人種の平等性とか文化の意識のようなことは述べず、扱うテーマのみ紹介し、次に三つの文化、次に心理や伝播に関する理論的な点など、一つのテーマを扱ったエッセーにすべきです。すべてあなたの文体で書き、他の論文は捨てなさい。もう見ないようにして高尚な読者を狙いなさい。そうすればとてもいいものになるし、ボアズ的、ローウィー的、ドイツ的な部分がなくなり、それ自体に一貫性があり、あ

なたとも一致するようになります。私が言っていることは非常に大事だとあなたはわかってくれると思います。そしてあなたが普通のやり方や、しなければならぬようなことはすべて忘れ、完璧なものを書いて下さることを望んでいることもおわかりいただけると思います。私が書いたことを理解していただけることを願っています。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1933年5月19日

……授業が終了し、本¹⁰⁰)に取りかかっています。あなたをご覧になった本の部分が気に入らないことを知り、がっかりしています。最初の2つの章を削除することについてみんなに相談したのですが、みんなは反対しています。バニーやオットーといった文化人類学の人たちでさえ、入れておくべきだと言います。私を喜ばせるためだけにそう言うのかもしれないと思って、あらゆる手段を尽くしたつもりなんです。もしかしたら、それは止めることができないのかもしれない。いずれにしても章を見直して、削除したり、並び換えたりしました。たとえば、伝播と進化に関する議論は削除しました。全部がダメだとあなたが思わないことを望みます。北西海岸のインディアンとアブノーマル¹⁰¹)に関する論文を受け取っていないと聞いてがっかりしています。どちらもまたお送りします。アブノーマルに関する論文は、マーチソンの学術誌に掲載されます。

〔ルース・ベネディクトからマーガレット・ミードへ〕

1933年7月2日

……本¹⁰²)とズニ神話¹⁰³)の論文を執筆中です。(どちらもこの秋に出版される予定です。)あなたのコメントが入った本の原稿を送って下さればよかったのに。そうしてもらえれば、何とかできたかもしれないと思います。単に全体を批判されたのでは、どうしようもありません。でも自分の基準に少しでも近づけるように最初の何章かを書き直しました。北西海岸のインディアンに関する章と、アブノーマル¹⁰⁴)についての論文はまだあなたに送っていません。なぜならどちらも一部のカーボン・コピーしかなく、議論を形づくるにあたり、どちらも私には必要だからです。もう少し満足できる形にするまで、お送りするのを待った方がいいと思っています。

〔レオ・フォーチュンからルース・ベネディクトへ〕

ロンドンから日付なしに送られ、

ルース・ベネディクトが受け取ったのは

1934年1月5日

あなたの本¹⁰⁵)が今、手許に届きました。とても明るい装丁でりっぱに見えます。私は虚栄心が強いので、自分に関する部分を先に探しました。そしてあなたと二人で何かを構築したよう

な思いでした。ほとんどの人たちが他の学者に嫉妬心を持ったり、敵対心を露わにしたりするか、全く興味を示さないかなので、つくづく嫌になります。あなたはあるがままのことを信じてくれます。他の人たちは、自分たちがそれを作り上げたのではないかと疑い、そうではないかと悩みます。心配性の人たち——。

見た感じいいと思います。本当にあなたはあるがままを受け入れ、それをうまく表現してくれます。現地や現地の人たちを思い起こさせ、露骨に自己主張が強い私の本は感じさせません。そしてすぐに信じてもらえる時には用いることができる即、結論を導くスタイルを用いていないし、すぐにわかる適切な文章に改善されており、——最初に書き出した時は、事実と主張がちぐはくになり、文体がメチャクチャでした……

とても立派です。全体に満足いくものだと思います。

注

- 1) 1920年頃に死亡した若い作家で*The History of a Literary Radical and Other Papers*の著者、ニューヨーク、ヒューベッシュ社、1920年出版
- 2) 1924年トロントで開催された科学推進英国学会、そしてその後継続している心理タイプと文化についての興奮した会話に言及している。
- 4) イザベル・ゴードン、彼女は博士論文のため共通の先祖をもつテネシーの山の集落に住む人たちの問題を取りあげていた。
- 5) キングスコートというのはルース・ベネディクトが女性といっしょに小さな部屋を借りた場所で、その女性はニュージャージーで教師をしており、週末にしかニューヨークに帰って来なかった。
- 6) ジャーナルとは*Journal of the American Statistical Association*で、編集長はウィリアム・フィールディング・オグバーン
- 7) 博士論文のために書いた“An Inquiry into the Question of Cultural Stability in Polynesia”、*Columbia University Contributions to Anthropology*, 9、ニューヨーク、コロンビア大学出版、1928年
- 8) “The Methodology of Racial Testing; Its Significance for Sociology” *American Journal of Sociology* 31、No.5、1926年、657-667 ページ
- 9) 彼とはアメリカ自然史博物館で塔にある部屋で論文を書いていた時、一緒に仕事をしていた。
- 10) 修士論文のためイタリアの女の子もたちと仕事をしたことに言及している。
- 11) *The Pueblo Potter; a Study of Creative Imagination in Primitive Art*、参照、Columbia University Contributions to Anthropology VIII、ニューヨーク、コロンビア大学出版、1920年
- 12) 出版は未確認
- 13) Bronislaw Malinowski の *The Father in Primitive Psychology* 参照（Psyche Miniature; ロンドン、キーガンポール社、1927年
- 14) 1925年の夏、私たちはそれぞれのフィールド・ワークと一緒に出発しました。ベネディクトがこれまで見たことがなかったグランドキャニオンまでいっしょに行きました。彼女はそこからズニに戻り、私はサンフランシスコに行き、そこからハワイ経由でサモアに出発しました。このころのベネディクトの手紙は、私が熱帯地に行く許可をもらう経緯について書いているものが多く、フィールド・ワーク

- につきものの孤独感が私を憂鬱にさせるのではないかという彼女の心配についても書かれています。
- 15) ズニにいるとき、キャサリーン・ブレナーがベネディクトを訪問した。彼女はルース・ベネディクトがヴァッサー大学を卒業後、ヨーロッパに行った時に一緒に旅をした二人の友人のうちの一人であった。
 - 16) ズニにおける中心的なインフォーマント
 - 17) マーガレット・ミードが現地調査に持っていけるようにベネディクトがタイプした詩の選集
 - 18) 1920年代の詩の雑誌でルイズ・タウンゼント・ニコール、レオニー・アダムズ、ルイズ・ボーガン、そしてロルフ・ハンフリーらが編集者だった。
 - 19) この時にキャサリーン・ブレナーはサンタフェに戻っていた。
 - 20) これは内輪での言い方で、ボアズを裏切るということは文化人類学以外のことで時間を費やすということである。
 - 21) 『ポエトリー』の編集者ハリエット・モンロー
 - 22) ここのあとに彼女は“Here we come a-piping” (*Come Hither*, p.11) と “I had a little nut tree” (前掲書 p.191) を書き写している。何年も経った後、“I had a little nut tree”の方をスキヤダー・マツキールという文化人類学者が私に歌ってくれました。彼は心理分析によってこの歌の「本当」の意味を発見した人です。
 - 23) メーベルと結婚したタオス・インディアン、メーベル・ドッジがはじめてベネディクトの人生に現われた時のことを彷彿とさせる興味深い記述である。Story of my life の109ページ参照
 - 24) ウイリアム・オグバーンの友人で、レオニー・アダムズ、ルイズ・ボーガン、ルイズ・タウンゼント・ニッケルも参加した一人っ子の研究に携わった人で、ベネディクトの民話研究に興味を持ち、1925年～1926年の冬の間、ベネディクトの助手をする予定でした。
 - 25) *Journal of American Folk-Lore*
 - 26) 「最悪なのは私たちの怒りではない」という詩のオリジナル版(本文70ページにある)には以下の行がある：

and weary
Of all the woodnotes of that veery
We heard in love's lost countryside
 - 27) 本文71ページ参照
 - 28) 詩集。サピアからルース・フルトン・ベネディクトに書いた手紙を参照。
 - 29) メルヴィル・ジェイコブス、アレキサンダー・レサー、ジーン・ウェルトフィッシュ、テルマー・アダムソン、オットー・クラインバーグを指す。
 - 30) 1928年9月ニューヨークで開催された第23回国際アメリカ先住民学会
 - 31) これは間違いである。Thomas Mott Osbornは刑務所の改革を行った人である。[訳者注：原文では‘Papa Franz wears Thomas Mott's feathers’となっており、ベネディクトは英雄のOsbornに言及していると思われる。しかし、これは明らかにOsbornを別のOsbornと混同しているようである。]
 - 32) 「南西インディアンの文化の心理タイプ」を指す。第23回国際アメリカ研究学会の論文集、572-581ページ。本文では248-261ページ
 - 33) 『ネーション』127号、1928年9月26日発行、296ページ、この本の479ページの詩選集参照。
 - 34) 『マヌアの社会組織』ビショップ・ミュージアムの発行物、76巻、ホノルル、1930年。マーガレット・ミードはシドニー大学の文化人類学の教授であるラドクリフ・ブラウンの指示でアドミラティ諸島での調査旅行を行なった。

- 35) *Coming of Age in Samoa*, New York, モロー社出版、1928年
- 36) “Broken Homes” 『ネーション』128号、1929年2月27日発行、253-255ページ
- 37) “Americanization in Samoa” 『アメリカン・マーキュリー』16号のNo.63, 1929年、204-207ページ
- 38) “A Twi Relationship System”, *Journal of the Royal Anthropological Institute* 67号、(1937年)、297-304.
- 39) レオ・フォーチュンの著書、*Sorcerers of Dobu* 初稿
- 40) *Coming of Age in Samoa*、1928年8月末に出版されたものを指している。
- 41) *Social Organization of Manu'a*、この本はルース・ベネディクトに捧げたものである。
- 42) 「南西インディアン文化における心理タイプ」前掲書参照
- 43) 「慣習の科学」 『センチュリー』117号、No.6、1929年、641-649ページ
- 44) 「南西インディアン文化における心理タイプ」前掲書参照
- 45) 「アニムズム」 『社会科学の百科事典』、ニューヨーク、マクミラン出版、1930年、II、65-67ページ
- 46) *Sourcerers of Dobu* 初稿。この手紙はレオ・フォーチュンがコロンビア大学に提出したフェロースHIPの問題に関するものである。
- 47) 原住民の視点からみると因果関係がないという点
- 48) ベネディクトの1月10日の返事として書かれたものである。
- 49) これは1929年7月のドブでのフィールド・ワークで得ることができた。
- 50) ボアズ博士。ルース・ベネディクトは南西インディアンの学会に出席するために彼と一緒に西方にかけた。
- 51) ミードの論文“More Comprehensive Field Methods”。これは *American Anthropologist* 35号 No.1 に掲載。1933年出版、1-15ページ
- 52) レオ・フォーチュンの著書 *Manus Religion*、フィラデルフィア、American Philosophical Society、1935年
- 53) ラドクリフ・ブラウンは1931年夏、コロンビア大学で教鞭をとっていた。
- 54) マーガレット・ミード著 *The Changing Culture of an Indian Tribe* というタイトルで出版。ニューヨーク、コロンビア大学出版、1932年。“Reservation women” は軍隊用語で売春婦を意味することが判明した。
- 55) *The Changing Culture of an Indian Tribe* を指す。
- 56) マーガレット・ミードによる論文“An Investigation of the Thought of Primitive Children, with Special Reference to Animism”, *Journal of the Royal Anthropological Institute* 62号、1932年、173-190ページ
- 57) “Configurations of Culture in North America” 前掲書参照。
- 58) Margaret Mead の前掲論文 “An Investigation of the Thought of Primitive Children, with Special Reference to Animism” *Journal of the Royal Anthropological Institute* 62号、1932年、173-190ページ
- 59) *Patterns of Culture* の最初の草稿
- 60) レオ・フォーチュンの *Sorcerers of Dobu*、ニューヨーク、ダットン社、1932年
- 61) 前掲書「習慣の科学」
- 62) 「北米の文化形態」 *American Anthropologist*, 34, No.1 (1932年) 1-27ページ
- 63) 「文化人類学とアブノーマル」 *Journal of General Psychology*, 10 (1934年) 本書の262-283ページ参照

- 64) 北西海岸のインディアン
- 65) “Anthropology and the Abnormal” 前掲書参照
- 66) 予定されていたが、書かれなかった。
- 67) マーガレット・ミードの「アドミラル諸島の近親関係」*Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, 34号パート2、ニューヨーク、1934年
- 68) 前掲書“Configurations of Culture in North America”参照
- 69) 南西、つまりズニ族を指す。
- 70) 北西海岸、つまりクワキユートル族を指す。
- 71) エドワード・サピアの論文“Culture, Genuine and Spurious” *American Journal of Sociology*, 29号、No.4, 1924年、401-429ページ
- 72) アメリカン・エスノロジカル・ソサエティの会合を指す。
- 73) 科学の発展のためのアメリカン・アソシエーションの年次総会で、この中のH分科会は文化人類学に焦点を置くものだった。
- 74) ラドクリフ・ブラウンがフォーチュンのドブ族に関する初稿を読んだ時、その記述の正確性を信じなかった。次に二稿を読んだ時、その説明が正確だと確信し、ドブ族の文化は「病的な文化」だと呼び、存在するべきではないと言った。
- 75) モーリス・オブラーの論文“An Analysis of Mescalero and Chiricahua Apache Social Organization in the Light of Their Systems or Relationship” 1933年シカゴ大学の文化人類学部に提出されたPh.D.論文
- 76) ユング的な「センセーションリスト」は感覚に頼る人を言う。ラドクリフ・ブラウンの反応を解釈すると、彼は鮮明な感覚を得ることができないために、現実性が全くないことを理論的に論じることができたと見える。
- 77) フランツ・ポアズの論文「文化人類学の研究の目的」*Science* 76, No.1983, 1932年出版、605-613ページ
- 78) *Patterns of Culture* の本のなかで平原インディアンの資料を使うことに対する私の手紙を誤解している箇所。ドブ族の資料を使うことに対するレオ・フォーチュンの反応については1932年11月21日のレオ・フォーチュンからルース・ベネディクトの手紙を参照。原著の329ページ参照。この段階ではベネディクトはこの手紙を受け取っていなかった。
- 79) *Sorcerers of Dobu* は、前年の春にルース・ベネディクトがフィールド・ワークをしている時に受け取っていた。
- 80) *Encyclopaedia of the Social Sciences* の「近親相姦」の項、ニューヨーク、マクミラン社、1932年発行、620-622ページ
- 81) 実際は Yuat River でこの川はセピック地区にあるセピックの支流であり、そこでムンドグモール族の調査をしていた。
- 82) この影響で同じ予算でさらに長く調査することになった。
- 83) パプアニューギニアに住むムンドグモール族を指す。
- 84) パプアニューギニアのチャンブリ族が住む村を指す。
- 85) マーガレット・ミードの“Where Magic Rules and Men are Gods”、『ニューヨーク・タイムズ』誌、1933年6月25日、8-9ページ、18ページ
- 86) C.W. ハートが書いたミードの *Growing up in New Guinea* の書評に関連したものである。
- 87) 詳細については上記参照。部族を守るために名前を出すことがはばかれた。

- 88) この時点でミードたちはチャンプリーに4ヶ月近く滞在していた。
- 89) アンブンティはセビック川を250マイルほど遡ったところにあり、その当時セビック地域の主な官庁地だった。
- 90) この手紙はルース・ベネディクトからの1932年12月28日付けの手紙に対する返信として書かれた……
- 91) これは不況のなかの就職状況に言及したもの。
- 92) ここで言っているのは男気性と女気性の逆転に関するひらめきで、後の1935年ニューヨーク、モロー社出版の*Sex and Temperament in Three Primitive Societies*『三つの未開社会における性と気質』につながる。
- 93) フォーチュンのこのひらめきは、ここでは再生されてはいないが、手紙の一部には書かれており、いとこ同士の結婚に関する発見をいう。それを論文“A Note on Some Forms of Kinship Structure”に書いた。
- 94) グレゴリー・ベイトソンとレオ・フォーチュン、そしてマーガレット・ミード
- 95) 本の著者はヘンリー・ハンデル・リチャードソン Henry Handel Richardson だが、これはある作家のペンネームである。
- 96) *Patterns of Culture* の初稿
- 97) 論文“The Science of Customs”に関するもの
- 98) 論文“Configurations of Culture”に関するもの
- 99) これは*Patterns of Culture* の第2章に収められた「粘土のカップ」という未発表の論文を指す。
- 100) *Patterns of Culture* を指す。
- 101) 「文化人類学とアブノーマル」参照
- 102) *Patterns of Culture* を指す。
- 103) Zuni Mythology、2巻本、*Columbia University Contributions to Anthropology*, 21、ニューヨーク、コロンビア大学出版、1935年
- 104) 前掲論文“Anthropology and the Abnormal”
- 105) *Patterns of Culture*、ボストンとニューヨーク、ホートン・ミフリン社出版、1934年